

旗を立てる——「東京で(国)境をこえる」3年間の記録

「東京で(国)境をこえる」事務局 編



「東京で(国)境をこえる」について



アートプロジェクト「東京で(国)境をこえる」の記録集をお届けします。「東京で(国)境をこえる」は、shelf という劇団が、初めてのぞんだ3年間に渡るアートプロジェクトの名称です。アートプロジェクトとは、現代美術の文脈から出て来た活動の名称で、作品を完成させることそのことよりも、制作プロセスを重視するものであり、また美術館のような制作や鑑賞のための専用の場所から外に出てより広範囲に、あるいは社会的な文脈でアートを捉えたり、アートを媒介に地域を活性化させようとしたりする取り組みなどを指す言葉です。

なぜ劇団がアートプロジェクトを？ というと、ここには二つの大きな理由がありました。一つには、shelf がこれまで長く活動してきた中で感じて来た課題に、shelf が本当に届けたい体験や価値を届けるべき相手は、実は shelf のファンであり、あるいは演劇のファンで劇場に足しげく通ってくださる演劇の観客だけではないのではないのか？ というものです。

私たちは演劇活動を通じて、人間という存在のいわゆる言いがたい不可思議さ、切実さ、矛盾、人間の生きる社会の不条理や複雑さなどを描き出

し、そのことで観客を歓待しようと努めてきました。完成された商品を消費するようなかたちでの鑑賞よりか、〈劇場体験〉ともいうべき、ほかに得がたい濃密な〈体験〉そのものを届けようとして来ました。そのためには作品の成果だけではなく、むしろプロセスを重視してきました。より充実した体験を、一つのプロセスとして——観客の生の一部分として届けられるか。そのことを考えた抜いた結果、私たちは一度劇場の外に出て、演劇という枠組みからも外に出て、自分たちが表現を通じて向き合いたいことと、徹底的に向かい合おう。そう決意してのぞんだのがアートプロジェクト「東京で(国)境をこえる」でした。

もう一つは、shelf が2014年のノルウェー公演以降、タイ、中国、インドネシアなど毎年海外での公演や海外の劇団と国際共同制作の経験を重ねて来て気づいたことに拠るのですが、この国際共同制作という、自分と異なる文脈を背負っている他者と出会い、対話やクリエイションを通じて〈協働〉することの面白さ、これを何とかして、海外に出かけるのではなく東京にいながらにして(なぜなら東京にはこれだけの〈外国人〉が住んでいるのだから)、少しでも多くの人が、それを

体験できるような〈場〉を作りたい。というものでした。

「東京で(国)境をこえる」は、社会包摂や社会の多様性ということを考えながら、社会の課題を解決するための活動の姿をしているように見えます。じっさい、ホームページなどではその活動概要を〈多くの在留外国人が生活する東京において、「見えない国境(壁)」は存在するのかという問いを出発点に、異文化間の距離や接点を探り、在留外国人と日本人の日常的な出会いの場を生み出す拠点(コミュニティ)の形成を目指すプロジェクト〉である、と説明しています。ですが、その背後にある理念は、今述べてきたような二つのものでした。

日本社会には解決しなければならない問題が山のようにあります。外国人の問題を考えるのであれば、入国管理局の問題や、移民、難民について。あるいは技能実習生(制度)のことも考えるべきでしょう。国境に限らず、社会を分断したり人と人とを阻害したりする境界線や壁は、国籍だけでなく人種や、宗教、文化的背景、政治思想、ジェンダーやセクシャリティに基づく差別など、枚挙

にいとまがありません。しかし私たちは、あえてそこには直接触れず、人と人が、たとえ異なる文脈を生きていようと、いや、互いに異なる存在であるからこそ、その違いを尊重し合い、面白がることのできるような、そんな関係を育めないか。問題をあげつらい、悲しい表情をしたり正義を声高に叫んだりするのではなく、人と人が体の底に共通して持つ交歓する力と笑顔とで、多くの方がより生きやすい社会を作りたい。そしてそれは、考えや理念を同じくする者同士ではなく、異なる他者が協働する喜びを知ったその先にあるのではないか。今、3年間の活動の一区切りを迎え、少し未来を見据えて、私はそのようなことを考えています。この記録集が、私たちの通った紆余曲折も含め、同じ志を持つ人々へのささやかな里程標となることを願っています。

「東京で(国)境をこえる」ディレクター
矢野靖人

はじめに	2
Chapter 1 活動の記録 振り返って見えるもの	
「東京で(国)境をこえる」準備会 (2019～2020)	8
「kyodo 20_30」(2020年度)	16
2020年度活動記録	19
「kyodo 20_30」(2021年度)	26
2021年度活動記録	29
「ここから展」	40
「意味をこえる身体へ：ショットムービープログラム」	44
「新大久保お散歩学派」	48
「話しあうプログラム サカイノコエカタ」	52
Chapter 2 制作物	
2020年度	
「東京で(国)境をこえる」ロゴマーク	58
「東京で(国)境をこえる」ホームページ (2020年度)	58
「kyodo 20_30」制作ノート 01～04	59
「東京で(国)境をこえる」2020年度活動記録	60
2021年度	
「東京で(国)境をこえる」ホームページ (2021年度)	61
「東京で(国)境をこえる」活動紹介カード	61
「話しあうプログラム サカイノコエカタ」フライヤー	62
kyodo 20_30 成果発表会「ここから展」フライヤー	62
「東京で(国)境をこえる」はなんですか？(活動紹介動画)	63
事務局座談会	64
おわりに	70

活動の記録振り返って見えるもの

「東京で(国)境をこえる」準備会 (2019) (2020)

活動概要

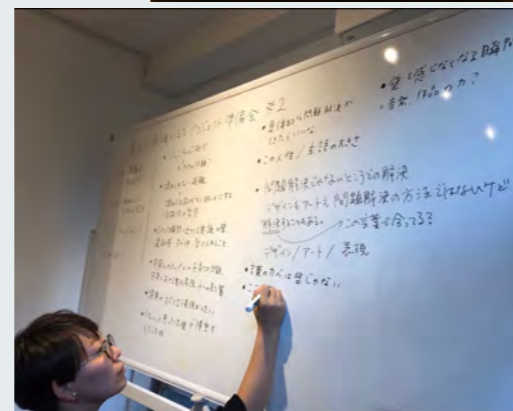
「東京で(国)境をこえる」は、多くの外国人と外国にルーツを持つ人が生活する東京で、「東京には見えないことにされている様々な壁がある」という仮説をもとに、その「見えない(国)境、壁」について考えるアートプロジェクトです。東京アートポイント計画の事業として、2019年に始まりました。

「東京で(国)境をこえる」のゴールは、東京に生きる人々、特に外国にルーツを持つ人々が感じる個人と他者/社会/世界との境界と、それにまつわる問題を探りながら、日常的に出会う場(コミュニティ)を作ることです。

2019年の準備会では、そのゴールに向かうための土台作りをしました。主催である一般社団法人shelfを中心に、「東京で(国)境をこえる」の問いを一緒に考えてくれる人を対話に巻き込んで、事業の構造設計とプロジェクト開発を行いました。在留外国人と日本人が日常的に出会える場とは何か? 見えない(国)境はどこにあるのか? など、「東京で(国)境をこえる」にとって大事な問いを考え、協働しました。準備会を重ね、未来の計画を進める中で、「東京で(国)境をこえる」は参加する人にとって必要な居場所にもなりました。

準備会は2019年度で終わる予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響でメインプログラムである「kyodo 20_30」の開始が延期となったことで、2020年8月まで続けました。

2020年度の準備会はほとんどの回がオンラインで行われました。困難に直面しながらも、コロナ禍におけるアートプロジェクトのあり方の検討やオンラインでもできるプログラムの考案など、「kyodo 20_30」の開催に向けて、活発な議論が行われました。



「東京で(国)境をこえる」準備会
(2019) (2020)

2020年	
4月7日	新型コロナウイルス感染症対策として、東京を含む7都府県に緊急事態宣言が発出される。
4月10日	事務局とアートカウンシル東京で初めてのオンラインミーティング実施。以降ミーティングはオンラインで行われる。4月から始まった準備期間は9月以降のプラン作成など話し合いが中心となった。しかしそれに留まらず、画面越しでも実施できるワークショップや共同制作など、オンラインならではの活動も試みた。
5月3日～7月19日	プロジェクト準備会 #1～#10 オンラインで実施。
7月26日	準備会 #11 久しぶりの対面で実施。コラボレーターの富田充さんのガイドのもと、品川旧東海道エリアを歩く。
8月2日～8月23日	プロジェクト準備会 #12～#14 オンラインで実施。#13では、ゲストに多文化保育イニシアティブ代表で、日本語教師、保育士の山田拓路さんを招く。
8月12日	「東京で(国)境をこえる」ホームページ開設。 「kyodo 20_30」プレイヤー(参加者)を募集開始。
9月6日	「kyodo 20_30」オンライン説明会

あやだ しょういち

俳優。早稲田大学第一文学部在学中に演劇活動を開始。reset-Nを経てフリーランス。劇団桃唄309やTheatre Company shelfなどに客演するほか、フランス・シンガポール・オーストラリア・マレーシア・イタリアなどと国際共同制作に取り組む。NPO法人中野ケアセンター terrace にて文化庁のコミュニケーション教育事業や、ピースセルプロジェクトにてイラクの平和教育支援など、国内外でワークショップも行う。2020年度「kyodo 20_30」コラボレーター、2021年度「kyodo 20_30」フリンジプログラム「新大久保お散歩学派」代表。



激動の一年だった。と、書いてみて手が止まった。あの一年、私たちは動いていたと言えるだろうか。

止まった。と、感じたのは、言うまでもなく、2020年の春だ。会えなくなった。無論、私たちは動こうとした。オンラインに切り替え、準備会を重ねた。しかし、今、思い出されるのは、対面で会えた時のことばかりなのだ。

2019年秋、初めて準備会に参加したのは、イラクでワークショップをして帰国したばかりの頃だった。国境をこえた経験を、日本で、演劇とは違った文脈で、面白がってもらえることが嬉しかった。早速、チームビルディングのために、小学校でやっているワークショップを体験してもらったりもした。共同作業が盛り上がったこと以上に、見えない壁や境界線につなげて深いふりかえりをしてもらえたことに驚いた。集まりの最後に小さな創作をすることを、提案したりもした。集まって手を動かしてつくることで、見える何かがある。この時、協働の可能性に手応えを感じられていたからこそ、その後、何度も強いられることになる、会えないということを乗り越えられたのではないだろうか。

だからやはり、よく思い出すのは、会えなくなった前後の、二つの作品づくりなのだ。前の、

止まるなら激しく

というのは「kyodo 20_30」の名前を付けた日。経堂アトリエのホワイトボードの前で、プログラムに込める願いを語り合った。後の、というのは「kyodo 20_30」のオンライン説明会。カメラの向こうのまだ見ぬ誰かに手を振った後、話し合ってきたことが形になった気がした。

そして「kyodo 20_30」の初回、ようやく会えた参加者に、私はまたワークショップを体験してもらうことになる。動いた。と、思った。また会えなくなるとは、知る由もなかったが。

話は前後する。会えなかった2020年の春と夏、私たちは止まっていただろうか。オンラインに「帰り道」と称した余剰の時間を導入した。オンラインで行えるワークショップも模索した。私たちは対面で会うことの意味を問われていた。私は俳優として体で抗おうとしていた。あの夏撮った「自撮り映像日記」には、ある種の激しさが映っている。

俳優は舞台の上で止まっている時も、体の中で激しく何かを動かし続ける。止まっているように見えた私たちも、中では激しく動いていたからこそ今がある。またいつ止まるか分からない。止まるなら激しく。激動の時代を“激止”して乗り越えよう。

綾田将一



撮影：小林真行

てらかど しん

会社員。旅と批評の雑誌『LOCUST』編集部員。2020年度「kyodo 20_30」コラボレーター、「話しあうプログラム サカイノコエカタ」第3回、第4回のレポートを執筆。

期に、1～2週間に1度のペースで行われたミーティングが、私自身が関わりを持った約1年間の活動の中で、もっとも面白さを感じた時間でもあった。ミーティングでは、参加者全員にとって未曾有の事態であるパンデミックの状況に置かれたことで、いまアートプロジェクトを行うとすれば、それはどのようなプロジェクトであるべきか、といった内容を中心に議論が行われたと記憶している。予算、時間、人員などのテクニカルな制約に縛られない状態で行われた議論は、具体的な形になる以前の、潜在的にさまざまな展開の可能性を秘めたアイデアが現れては消え、消えては現れるような状態だった。その過程で、編集補助として始まった私の関わり方も、いつのまにか、ワークショップの実施などを行うコラボレーターとしての参加に変化していた。

そして9月、ようやく参加者募集のための説明会に至る。最終的に実施されることはなかったが、私はこの時点で、未来派やダダの「宣言」を参加者で読み、内容を比較検討するワークショップを企画していた。形にならなかったアイデア、こえられなかった境。それらをどのように考えれば良いのか、自分の中でまだ結論は出ていない。

いのうえ あすか

一級建築士。2016年、世田谷経堂鎮守の社、天祖神社を臨む築43年の黄色い3階建て民家を活用し、地域の活動拠点、経堂アトリエを始める。出逢うすべてのヒト・モノ・コト・イキモノたちと丁寧に対話しながら、それぞれにとって心地よい余白の創出を目指す。経堂アトリエ代表。



2019年吉日、「東京で(国)境をこえる」ディレクターの矢野さんより連絡を頂きました。「経堂」で「協働」し、「共同」体(コミュニティ)を作る活動ができる拠点を探していらっしゃるとのこと。2016年に「経堂アトリエ」を開設してから3年が経っていて、少しずつ地域に浸透してきたように感じる一方、「経堂アトリエ」が、社会的役割を果たすための今後の活動展開について模索している時期でした。

「東京で(国)境をこえる」——見えない(国)境について話し合い、アート活動へ広げていくとのこと。劇団主宰の矢野さんの演劇的アプローチもあり、我々が建築的アプローチで既成概念、固定観念で縛られていることに気づきを得ることができないか。矢野さんの熱い思いをお聞きして、ありがたくお受けいたしました。

キックオフでは、経堂やアートに関わる様々な方が経堂アトリエにお越しになり(今振り返るととても「密」に!) 経堂の商店街で調達されたお惣菜を片手に語らう皆さんの笑顔がとても嬉しく、「経堂アトリエ」は、皆様の活動にしなやかに対応できる場でありたいと思いました。

3年間を通して丁寧な育むプロジェクト。1年目のプロジェクトの準備会では、「経堂アトリエご近所大学」の仲間も入れていただきながら、オープンな参加者と共に各自の思いを出し合いました。(国)境って何? 何に困っている? 境界って何?

殆どの方が初対面。どのようにお互いを知るのか、距離感も多種多様。時にホワイトボードに、付箋に書き出ししながら、ワークショップに取り組みながら、回を重ねるごとに参加するメンバーの個性が明らかになってきます。

この時期に私は、いい意味で「尖る」ことの重要性に気づきました。——人に「寄り添う」というのは偽善で高慢かもしれない。役割を果たすには、時には自分「が」主体となって出逢うすべての出来事を丁寧に読み解き、対話し、そして、言語化し、デザインすること。——そんなことを考えました。

そして積み重ねてきた対話を基に、いよいよ具現化していこうという2020年、新型コロナウイルス感染症の発生により、直接出逢うことが儘なくなりました。この間、プロジェクトの中心メンバー同士で毎週、オンラインで対話をしました。画面越しの対話。リアルなのかフィクションなのかも曖昧な。オンラインで対話をしている時間以外の時間も大切にしよう、このコロナ禍の時間をアーカイブしておこう、と始めた1分間の動画リレーでは、自宅や出先の思い思いの場所から発信される映像、制約がある中でも、それぞれの対応方法があつて。今振り返ると、この3年間で最も濃密な時間でした。

1年半の準備会を経てようやく事業開始した、20歳～30歳を対象にし、経堂で協働し、共同体を作ろう、という「kyodo 20_30」。公募で集まってくれたプレイヤー達とは、殆ど対面でお逢いできないままに、初年度2020年の年度末には、本来成果発表会で行うはずだった作品のための「制作ノート」を作る共同制作を行いました。オンラインや文字で対話しながら創り上げていく「制作ノート」は、対面で逢える時より一層心中を曝け出す媒体になったのではないのでしょうか。

2021年、新たなメンバーが加わり、「経堂アトリエ」で対面できた時の喜びは非常に大きなものでした。白いギャラリーがカラフルに彩られ、リビングや屋上ではカメラが廻り、笑い声が響き、まるで「経堂アトリエ」が生命体になったような感覚を覚えました。

「東京で(国)境をこえる」で出逢った方々はみな、それぞれの違いを受け入れ、意見に相違が生じた際にも、そのまま通り過ぎることはなく、必ず立ち止まり、納得がいくまで対話します。これが(国)境をこえる、という行為そのものだと感じています。

「経堂アトリエ」は、これからも末永く皆様の拠り所としてありたいと願います。3年間、ありがとうございました。



はせがわ ゆうすけ

新潟大学 博士前期課程2年 哲学(美学、現代フランス哲学)。「東京で(国)境をこえる」準備会に参加、2020年度「kyodo 20_30」コラボレーター、2021年度「kyodo 20_30」フリジプログラム「意味をこえる身体へ：ショットムービープログラム」プロデューサー、脚本執筆など。

はじめの段階で、ショットムービーにここまでコミットすることになるとは全く考えてもいなかった。そもそもわたしは新潟から参加している。修士論文も書かなければいけないタイミングだった。そんな状況で、対面撮影込みの映像制作に関わるなんてことは、予め言われていたら間違いなく拒否しただろう。「結果として関わった」という形でしか、ショットムービーへの参加はあり得なかった。

今手元に残っていると思える関係性やプロジェクトも、少し力を抜けば簡単に流れ去ってってしまうのだろう。わたしはこのアートプロジェクトが何かを残せたかどうかということについて、今の段階では何も言えないと思っている。3年間経過した今は何かか形になったというよりも、いろんな種が蒔かれた段階にすぎない。今後、それらの種が埋もれてしまわないように育てていくことでしか、このプロジェクトの意義は果たされない。パソコンと人間の区別すら忘却されていくような世界において、それはとても難しいことと思う。だけど、不完全ながらも3年間継続したことが忘却されていくのは、とても悲しい。今後どれほどのことができるのか全く分からないが、ここで生まれた芽を絶やさないために手を尽くしたいと思っている。

3年間のはじまりである2019年の秋を振り返ると、昔という言葉で形容することすら憚られる程に、色々なものが流れていってしまった。まだ人がマスクをしていなかった頃。ただ人が集まることを「密」とは言わなかった頃。人に「会う」といった時、直接会う以外の選択肢が考えられなかった頃。パソコンの平面に浮かび上がる他者との会話をもって、その人に「会えた」と少なからず捉えられるようになってしまったわたしたちは、2019年と比べたら確実に何かを失った。そして2022年現在、「会う」という体験における根源的な喪失すら疑われないようになっている。別にオンラインでいいじゃないか、と。「オンラインでいい」とは何だろうか時々考える。ディスプレイに人が映っていたところで、それはどこまでいってもパソコンである。そんな、パソコンと人間の区別すら忘却されようとしている。

この3年間では、いろんな人が来て、去って行って、また別の人が来て、ということが繰り返されていた。そんなことから、はじめから最後までずっといるメンバーに対しては、どうしたって愛着が湧く。色々なものがすり抜けて行った3年間だが、今たしかな手応えとして手元に残っていると見えるのは、人間関係と、はじめから最後までを見届けたショットムービーのプロジェクトである。

みなみだ あけみ

大阪音楽大学(トランペット)卒業。神戸大学発達科学部人間表現学科表現文化論音楽学教室に編入学。神戸大学大学院国際文化学研究科博士課程後期課程修了(学術博士)。専門は、芸術社会学文化政策研究。研究の関心は、シンガポールと日本の文化政策、コミュニティ・アートで「地産地消で、すべての人々が文化的に豊かに暮らせる芸術文化環境づくり」を目指している。近著に、『文化事業の評価ハンドブック—新たな価値を社会にひらく』(分担執筆、2021、水曜社)などがある。現在、日本学術振興会特別研究員PD、九州大学大学院芸術工学府非常勤講師。「在留外国人との共生を目指した文化政策—日韓星比較を通して—」(科研費20K20675)の研究の一環で「東京で(国)境をこえる」の参与観察を行った。



1970年代以降の新自由主義社会では、すべてのリスクが自己責任となる。私たちは、不安を拭うために自分をケアするのではなく、むしろ、私たちは不安を拭うために「自己監視」を強めた。「マジョリティ」グループから離れていないか。私は、「変」ではないか、と。

現在、「マイノリティ」という言葉は、エスニック・マイノリティのみだけでなく、様々な社会的弱者も指す。言葉の意図するものが変化していくなかで、多文化社会の構築に取り組むことは、様々なマイノリティ性、つまり交差性(intersectionality)について考察を深め、声をあげていくことに繋がる。

しかし問題は、交差性を持った複雑な問題を一度に言葉で紡ぐことが難しいことだ。では、どうすれば、複雑なものを複雑なまま伝えることができるのだろうか。筆者は、そこにアートの力が発揮するのではないかと考えている。

コミュニティ・アートは、「arts in / for / with / by / about」の5つの形態がある。筆者が参与観察者として参加した2年目は、外国人を「対象」とした「作品=コト」作りを志向していた点において、in / for / aboutの状態だった。この状態は、提供者と参加者にヒエラルキーが生じやすい。なおかつ、外国人を「対象」とすると、日本政府が追求する経済的利益をもたらす長期滞在者と、日本政府がいつでも追い出せるようにしている短期滞在者との間に溝が生じてしまう可能性もある。それも、開催時期がコロナ禍であったことは、その主従関係が強化されやすい。

「東京で(国)境をこえる」での難点は、計画に反して参加者のほとんどが日本国籍の「グローバル・エリート」と言えそうな人々であったことだ。しかし彼らは、インターセクショナルな問題を抱えているか、それに疑問を覚えていた。まさしく新自由主義社会に「不安」と「葛藤」を覚えていた。ここに集まった人々は社会を変えていくことを渴望していた。では、彼らの身体的感覚を、どうすれば社会を変え

る原動力となるのだろうか。さらに、「東京で(国)境をこえる」が目指していた在留外国人にまで、その思いがどうすれば届くようになるのか。

それは「共にするWith」の状態と、真の民主主義を志向することだ。最近『美術手帖』(2022年1月号)でも取り上げられた「ケアの倫理」の理論と、こうしたコミュニティに根差した活動を志し孤高の声を拾い上げていく「コミュニティ・アート」は、新自由主義社会のなかで零れ落ちていく人々を救い上げる手段である。これらの理論は、「共にケアすること」「共創すること」で、真の民主主義が拓かれていくことを目指している点で共通する。

この世界は、「再帰的」である。他者は自己の鏡である。プロジェクト=モノゴトを通して、彼らが身体的に感じていることが「社会化」され、「共にWith」場を創るのみならず、共に叫び、闘うものとなれば、その先には、「With Care共にケアすること」「Arts with the Community コミュニティと共に芸術がある/作られること」を通して、真の民主主義への道が開かれるだろう。そして、ここに参加していた人々の声が社会に届き、彼らに光が差すのではないだろうか。

本事業は黎明期にある。とはいえ、3年目に入り、メールでのやり取りを拝見していると、だんだんと、「Arts with the Community」の状況への変化しつつあるように見える。今後の彼らの活動を見守りたい。

参考文献

- ・Bauman, Z. 2000. Liquid Modernity. Polity Press. =森田典正訳(2001)『リキッド・モダニティ—液化化する社会』、大月書店。
- ・Beck, U. Giddens, A. Lash, S. 1994. Reflective Modernization- Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order- =松尾精文・小幡正敏/叶堂隆三(1997)『再帰的近代化 近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理』、而立書房。
- ・Tronto, J.C. 2015. Who cares? : how to reshape a democratic politics. Cornell Selects. =岡野八代訳(2020)『ケアするのは誰か?: 新しい民主主義のかたちへ』、白澤社。
- ・Minamida, A. 2019. 'Arts with the Community' in Singapore Community Arts? : A Case Study of Our Gallery @ Taman Jurong.『文化経済学』, 16(1), pp.66-82.

活動概要

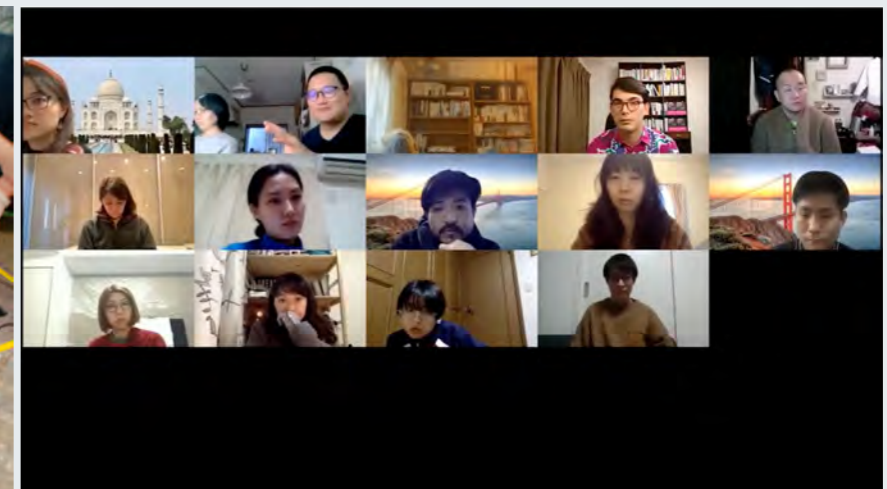
「kyodo 20_30」は、「東京で(国)境をこえる」のメインプログラムです。東京都世田谷区の「経堂」で、国籍・ことば・文化がちがう20歳～30歳の人たちと「見えない(国)境」について話し合ったり、作品を作ったりして、一緒に未来の世界を考えます。

2020年の「kyodo 20_30」は、新型コロナウイルス感染症の流行の影響で、計画よりも遅れて9月に始まりました。9月27日の第1回目の定例会には、公募で集まった20歳～30歳のプレイヤー*（参加者）と、準備会から参加していたコラボレーターの合計17名が集まりました。

参加者は全10回の定例会で様々なプログラムを経験し、チームで作品を制作しました。定例会のプログラムは、お互いを知り合うためのワークショップや経堂の街歩きから始まり、「見えない(国)境、壁」についてのディスカッション、「ハーフ」についてのレクチャーなど、知ることと話し合うことを積み重ねました。その後、4つのチームに分かれて、少人数での話し合いでさらに問いを深め、アクションの計画、実践に取り組みました。チームを作る際には、参加者の関心を「記号化／共感」、「感情」、「呪い」、「環境」の4つにグルーピングし、関心の近い参加者が集まるようにチームを分けました。チームになってからの活動のほとんどはオンラインとなりましたが、それぞれのチームのペースと方法で共同制作が行われました。

2020年度は、東京都に緊急事態宣言が発出されたために予定していた活動成果展を開催することはできませんでしたが、チームごとにクリエイションを記録する「制作ノート」が作成されました。

*2020年度の「kyodo 20_30」では、20代～30代で共同制作を行う参加者を「プレイヤー」、年齢に関わらず専門的知識を持ってプレイヤーをサポートする参加者を「コラボレーター」と呼び分けました。2021年度からは、全員を「参加者」としています。

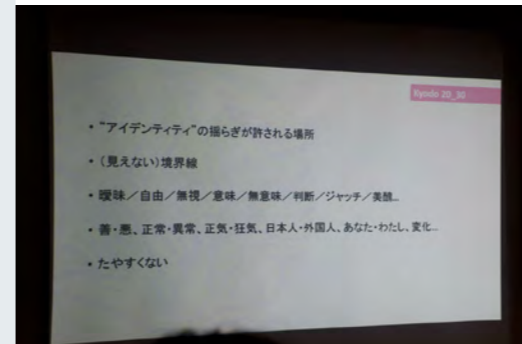


2020年

- 9月27日 kyodo 20_30 #1 綾田将一さんによるワークショップを行う。
- 10月10日 kyodo 20_30 #2 参加者の自己紹介を行う。
- 10月24日 kyodo 20_30 #3 経堂の街を歩く。「kyodo 20_30」のテーマには、「共同」と「協働」だけでなく「経堂」も含まれている。経堂の街にはどのような景色があり、どのような人が暮らしているのか。街を歩きながら探り、話し合った。
- 11月7日 kyodo 20_30 #4 「見えない壁や境界」について話し合う。「kyodo 20_30」の最終目標は、参加者それぞれが自らの関心をベースにしつつ他の参加者と共に共同制作を行うこと。そのための準備段階として、参加者が取り組みたいアクションについてプレゼンを行った。
- 11月21日 kyodo 20_30 #5 引き続き「見えない壁や境界」について話し合う。
- 12月5日 kyodo 20_30 #6 野村プリシラさゆりさんによるワークショップを行う。
- 12月19日 kyodo 20_30 #7 テーマごとの分科会となり、4つのグループに分かれる。「kyodo 20_30」の成果発表に向けて、4チームに分かれての活動を開始した。それぞれ「記号/共感」「感情」「呪い」「環境」というテーマのもとで、チームのテーマの練り上げや、成果発表会に向けたアイデア出しなどを行った。

2021年

- 1月17日 kyodo 20_30 #8 オンラインで実施。ゲストに大阪市立大学大学院文化研究科都市文化研究センター研究員のケイン樹里安さんを招く。
- 1月23日 kyodo 20_30 #9 オンラインで実施。アクションに向けて準備する。対面ではない形式での成果発表の方法が模索され、ウェブ上での展覧会やシンポジウムのライブ配信など、オンラインでの実施を視野に入れた準備が各チームで進められた。
- 2月2日 緊急事態宣言が3月7日まで延長される。緊急事態宣言延長に伴い、成果発表の場「経堂万(国)博覧会」の中止を決定。
- 2月13日 kyodo 20_30 #10 オンラインで実施。「経堂万(国)博覧会」の代わりとなる成果発表を「アクションを準備したプロセスの冊子制作(制作ノート)」とし、そのためのレクチャーを行った。
- 3月25日 制作ノート発行。
- 3月31日 参加者有志の成果物を、「東京で(国)境をこえる」公式YouTubeチャンネル「Beyond Invisible Borders」にて公開。



2020年度活動記録

(Facebook 記事より再構成)

#1 初回はワークショップで「協働」する

「お互いを知り合うためのワークショップ」を開催、ファシリテーションはコラボレーターの綾田将一さんです。最初はみんな、一人で部屋の中を均等に歩く、というところから始めて、歩きながらすれ違いざまにアイコンタクトをしたり、挨拶をしたりと徐々にコミュニケーションのレベルが上がっていき、最終的にはグループになってひとつの形を身体で作る！合間にディスカッションも挟んだりしつつ、みなさんがだんだん笑顔になっていくのが、見ていて嬉しい時間でした。

実は初回終了まで、参加者はお互いにちゃんと自己紹介をしていません（名前くらいの軽い挨拶のみ）。肩書きや活動履歴などの前情報のないまま、まずはお互いの身体を使ってコミュニケーションしてみる。これが今回のプログラムの狙いの一つです。

#2 これからの「共同」体の仲間のことを知る

前回のキックオフでは、あえて個人のバックグラウンドなどを知り合う前にまず身体を動かそう！というワークショップでしたが、ここにきてようやくそれぞれのルーツや、興味のあること、プロジェクトへの想いなどが明かされていきます。作ったものを見せてくれる人、スライドを作り込んできた人、パフォーマンスを見せてくれる人、とにかく喋るのが上手な人……それぞれに個性的な自己紹介をありがとうございました！プレイヤー、サポーターの紹介が終わると次のボタンはコラボレーターへ。これまでの活動紹介などに加えて、このプロジェクトへの想いなどを存分に語っていただきました。

#3 拠点である「経堂」を知る

事前にディレクター矢野の個人的おすすめスポットをピックアップ&インタビューをしまして、その音源を聴きつつ、Google マップを片手に歩くメンバーたち。

経堂はすずらん通りや農大通りに代表される、商店街が賑やかな街。インド料理、ネパール料理、タイや韓国などのアジア・エスニック料理など様々な外国料理のお店も目立ちます。少し脇道に逸れると大きなスギの保護樹木があり、自然も豊か。通りすがりの方も話しかけてくれるなど、街の温かさを感じた2時間あまり。



#4 #5 オープン・ダイアログ

4回目はプレイヤーのみなさんに事前に共有されていたテーマについて、自身の経験をシェアしていただきます。

- 1) これまで東京で、あるいは生きてきて、見えない壁や境界線を感じたことはありますか？もしあったら、そしてその経験を、みんなとシェアしても構わないようだったら教えてください
- 2) 「kyodo 20_30」に参加しようと思ったきっかけや、興味・関心を持ったポイントを教えてください
- 3) このプロジェクトを通じてどんなことをやってみたいですか？あるいはどんなことが実現できると楽しい、嬉しいですか？

驚いたのは、みなさんそれぞれに伝えたいことを事前に図にしたり、中には資料化してくれた人もいたこと！それぞれにこのプロジェクトにかける想いが伝わってきました。各々から出てきたキーワードでいくつか共通していたのは「言葉」「名前」「意味づけ」「身体」など。



5回目は議論の前提／ベース／共通の話題、を作るために、NHK BS1スペシャルで過去に放送していた『東京リトルネロ』という番組を鑑賞しました。

このドキュメンタリーを観て、「よく知っている話」「自分の身近でも起こっている話」あるいは「監督の視点を通して理解（共感？）しやすい」という意見がある一方、「自分たちはここに出てくる困窮した人たちのように、今日の食べ物や寝る場所に不安があるわけではない。しかも芸術などをやっていて、恵まれている」という意見もありました。

しかし、私たちが「明日の暮らしに困窮することなく、しかも芸術などをやっている」からには、あくまでも現実のリアリティに対して、芸術や表現の意味を自身に問うことを続けなければならないはず（もちろん当事者の困難を物語として消費してしまう危険性を認識の上で）（「当事者性」というトピックも大いに議論となりましたね）（というかそもそも誰もが何かしらの当事者ではあるわけで）

#6 コラボレーターWS

6回目はコラボレーターの野村プリシラさゆりさんによる、「手を動かすワークショップ」です。

「見えない境界」をイメージして絵を描いて、バラバラのピースを言葉でつなげる事で、それぞれが考える境界線を工作で具現化する。また、互いの描き方や、使う材料、つなぐときに選ぶ言葉から、話し合いだけでは見えないお互いの人格、境界線への考えのあり方を感じ、何か新しい発見があったら嬉しい。

今回のワークショップ開催にあたって、野村プリシラさゆりさんの言葉です。



#7 #8 #9 #10 分科会

7回目はプレイヤーのみなさんの関心ごとをキーワードで書き出し、それを選んでもらいながら、結果的に以下の4つのグループができました。

- 01：記号化／共感
- 02：感情
- 03：呪い
- 04：環境

8回目は社会学者で、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター研究員であるケイン樹里安さんをお招きして、2時間ほどオンラインレクチャー&ディスカッションを行っていただくことにしました。

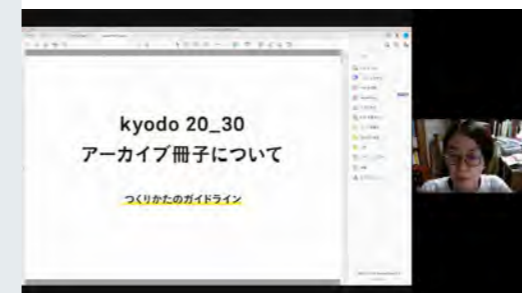
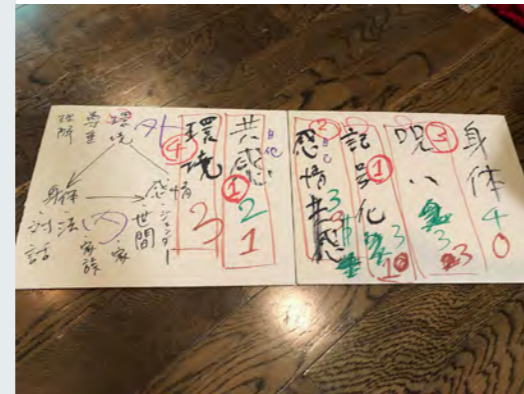
今回のレクチャーテーマは「境界線にふれる〈ハーフ〉の問題経験、NIKE 広告、ダイバーシティ、マネジメント」。限られた時間の中でも、話題は多岐に触れられ、箇条書き的に書き出してみても……

〈ハーフの言い方〉

・「ハーフ」「ミックスルーツ」「ダブル」「外国にルーツを持つ」などいろいろあるが、世代間でも言い方にギャップがあり、誰も傷つけない呼び方は存在しない。

〈芸術で何ができる？〉

- ・現代の映画産業を例に見ると、多様性とは、多様な創発性を高め生産性を上げるためのダイバーシティマネジメントであることが非常に多い。それは言わば、ポリティカルコレクトネスへの配慮でしかなく、そのような正しさのショーケースを見せるのではなく、ややこしさと折り合いをつけ続けることを芸術がすべきではなかろうか。
- ・ややこしさみたいな知らないことを、観客に考



2020年度の「東京で(国)境をこえる」の活動記録は、事務局の三上悠里、小林真行が担当してFacebookで発信を行いました。

「東京で(国)境をこえる」facebook



えてもらう地平に持っていく。

- ・例えば「黒塗り」みたいなことを、文化へのリスペクトを込めて行ったとしても批判は起きてしまう。しかし、疑うべきは「黒塗り」を無自覚に行ってしまう凝り固まった想像力にある。

と、興味が尽きないお話が次から次へと。前半と後半で、レクチャー&ディスカッションの時間を設けていただき、参加者からも様々な質問が飛びました。

9回目は事務局よりプランBについてのプレゼンテーション、そして各グループの進捗報告と分科会です。緊急事態宣言の延長のため、事務局がプランBとして提示したのは、プレイヤー、コラボレーターがそれぞれの視点から活動のプロセスを記録し、制作ノートとしてまとめること。

10回目からはプロセスを記述する制作ノートを、グループごとにまとめてもらうという行程に入ります。

制作ノートでは、このタイミングで改めてコラボレーター、プレイヤーのみなさんで共同制作をしていただきつつ、この半年間の総括となるようなものをと、それぞれのグループの考えや作品のプランを発表してもらおうと同時に、これまでの半年間を振り返ってもらう要素も入れた構成としました。



あきら

俳優、コンテンポラリーダンサー、脚本家。「表現集団りでんぶしょん」主宰。東北大学大学院文学研究科修了。「身体表現とは遊び道具である」という哲学をもとに演劇、ダンス、脚本、ワークショップなど幅広い活動をおこなっている。2019年、トーキョーアーツアンドスペース本郷にてフィジカルシアターカンパニー GERO（主宰：伊藤キム）「踊ってから喋るか？ 喋ってから踊るか？」出演。2021年、東京都美術館×東京藝術大学協働アートプロジェクト「とびらプロジェクト」10期アートコミュニケータに採用。2020年度「kyodo 20_30」プレイヤー、2021年度「kyodo 20_30」参加者。

と、自分の身長が低いことからくる身体観などきわめてパーソナルな話をしました。初対面の人たちですが「ここに集まった人たちは“打てばきつと響く”」と直感しました。そうした自己開示を安心してできる空気感とメンバーがこのプロジェクトにはあり、最終的にはウェンさんの映像作品で、北千住の路上400mを仮面をつけて即興で踊る「自己開示の向こう側」に自分が到達したことも今では貴重な宝物な思い出です。

他のアートプロジェクトにもいくつか参加していますが、そのように思える場はこの「kyodo 20_30」だけです。

それはおそらく他の方々の言葉の影響があります。僕も含めて「kyodo 20_30」の皆さんは自分の言葉を、自分で悩みながらお話しする印象があります。

話し言葉が情報伝達としての意味と価値に還元されてしまう現代社会においてそうした言葉は、受け止められる場所が限られています。

しかしながら自分が本気で悩み考えていることや結論の出ない物事という言葉の断片を受け止め皆で分かち合う場こそ、今この時に必要であり、それがkyodo だったのではないかと思います。

私が「kyodo 20_30」で強く関わった活動は主に2つです。

1つは集団での脚本創作。もう1つが映像作家、研究者でもあるウェンさんのショットムービー企画への参加です。

脚本創作では、5名ほどのメンバーで「呪い」という大テーマから「境界線」「相手を理解すること」「家族」という要素から私が創った脚本をたたき台にして全員でブラッシュアップ、紙の冊子を作成しました。良い意味で横道にそれていく感覚は意外と同世代とは味わえないことが多く、20、30代は理屈という正しさの呪いにかげられているのか？とも思いました。

もう1つは俳優として参加した映像作品です。ほとんどアドリブだったので自分が事前に練っていたプランから乖離していき、役を離れた自分自身が常日頃思う真の言葉が語られるなど自分自身でも新たな発見がありました。完成が楽しみで仕方ありません。

こうした活動の中でこのプロジェクトには相手の自己開示を受け止められる人達が集まっているように感じました。私は最初の自己紹介で何故か、自分の苗字が家族の都合で何度か変わっているこ

ゆう

仙台生まれ。神奈川育ち。演劇や美術鑑賞、音楽を聴くこと、読むこと、イラストを書くことが好きです。フェミニズム、クィア理論、障害学、手話、アクセシビリティ、音声ガイドなどに興味があります。2020年度「kyodo 20_30」プレイヤー、2021年度「kyodo 20_30」参加者。



「kyodo 20_30」には、20歳から30歳ぐらいまでの参加者ということもありますが、2020年から2030年までという意味もあると思います。1～2年前のことを1000字書くということなので、難しいと思いながら書いています。

「kyodo 20_30」は、演劇ジャーナリストの徳永京子さんのリツイートを見て知りました。興味のあるテーマだったこと。20代後半でしたので、年齢的にも参加できる時に参加した方が良いと思います。2020年度、前半は対面で会えていました。

第1回は予定が合わず、第2回から参加しました。

自己紹介の時間は、いろいろな来歴などを知れて面白かったです。(コロナ前は)観劇をよくしていたのですが、演劇に関わっている方が比較的多かったのも嬉しかったです。また、オフラインの時は終わった後少し話せたりできたのは楽しかったです。

記憶に残っていることとしては、経堂の散策が楽しかったです。文具屋「ハルカゼ舎」や、キュウリのビールを飲んだりしました。その時の班では行けなかった「ホットケーキ つるばみ舎」には、「kyodo 20_30」の活動拠点である経堂アトリエに行く前に訪れたりもしました。

最後の方は、新型コロナウイルス感染症の影響により成果展が行えないということで記録冊子を作ることになりました。4つのチームに分かれて

の製作です。「記号化・共感」「感情」「呪い」「環境」というテーマどれも興味があったので、選ぶのは難しかったです。わたしは「呪い」のグループでした。同じ班員の友達の話の皮切りに、エジプトの話や、演劇としてどう見せるか考えたり話し合うのは、良い体験でした。わたしたちの班では、Google ドキュメントをみんなで編集していききました。それが新鮮だったみたいな意見がありました(また担当を決めて単にくっつけるだけではなかったのが良かったという意見もありました)。ただ、他のグループの人とほぼ関わることがなかったのは残念でした。

残念だったのは、「国境」や「アート作品の制作」とは離れがちだったこと。ケイン樹里安さんのイベントに、リアルタイムで参加できなかったこと。日本語での話し合いが難しい場合でも、UDトークなど解決できる方法はいくつかあるのに、それができなかったこと。

最後の振り返り会も、「来年どうすれば良いか」みたいなことを話したい人もいたが、仕事みたいで、わたしもその話を今するのかという気持ちはあった。

いたるところで起こっていることすし、それ自体が悪いことではないと思います。また、「kyodo 20_30」以外にも含めてですがミスコミュニケーションとかが気になっています。また、みんなが使いやすいツールはない、もしくはそう言われがちなのが気になっています。

そのツールの最たるものが「言語」だったりすると思うので。

活動概要

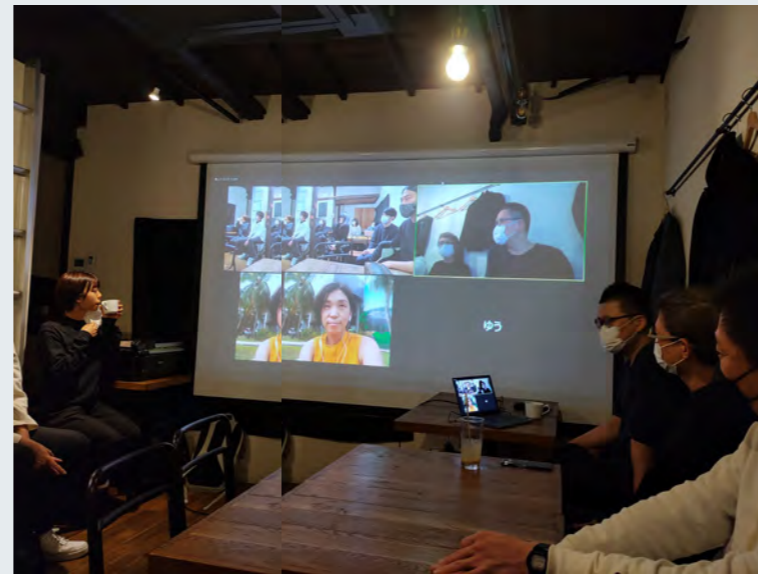
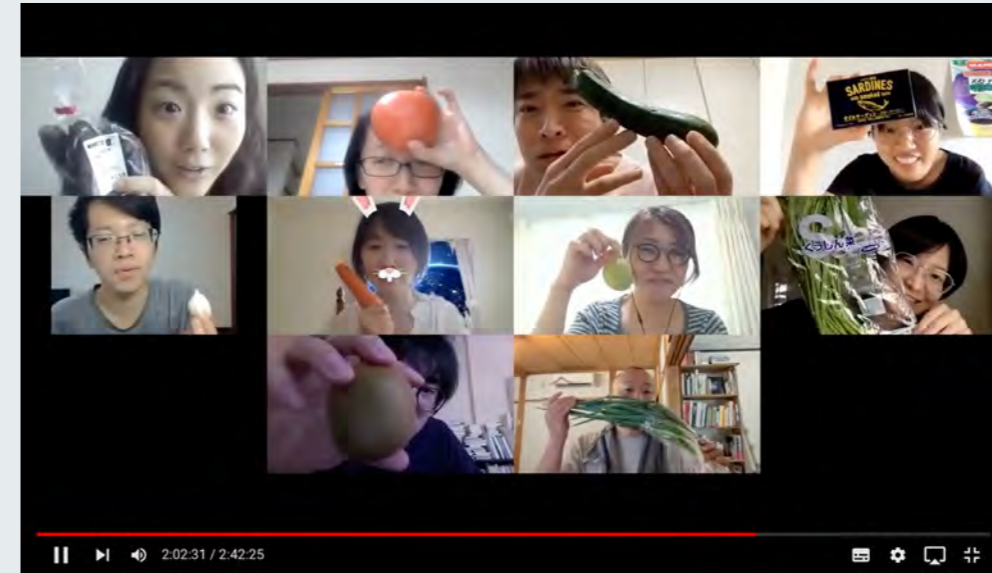
2021年は東京オリンピック・パラリンピックが開催され、国境や障害などの「目には見えない(国)境」をめぐる社会問題をより強く感じ、考えざるを得ない期間でした。3年目を迎えた「東京で(国)境をこえる」は、2020年の経験を活かしながら、コロナ禍の制約の下で活動を続けます。

「kyodo 20_30」では、新しい参加者募集に向けて、2020年度の反省をもとに運営方針の修正を行いました。

まず、活動のテーマを東京にある「国境」に絞りました。2020年度の活動を通して、社会には様々な境があることを知りました。その多様な境の中から、「kyodo 20_30」で向き合えなければならぬ最も重要なテーマとして、改めてこれを選択しました。同時にもう一つのメインプログラム「話しあうプログラム サカイノコエカタ」を立ち上げ、「kyodo 20_30」では取りこぼしてしまう境に向き合う場を作りました。

次に、活動の発信に「やさしい日本語」を使うようにしました。より多くの人々に伝わる言葉を使うことで、言語という壁を乗り越えやすくなることを試みました。

2021年度の「kyodo 20_30」は、これらの方針の修正を経て始まりました。新型コロナウイルス感染症流行の影響は依然として大きく、第1回から第9回までの定例会がオンラインでの開催となりました。画面越しに出会う誰かと一から関係を作ることの難しさに直面することもありましたが、その一方でゲストはマレーシアから、参加者は日本にいながらオンラインで話をするなど、生活に馴染み始めたツールを活用した試みも見られました。第10回目以降は対面でも定例会を開催できるようになり、参加者は顔を合わせて作品についての話し合いをすることができました。じっさいに作品制作が始まると、「kyodo 20_30」の参加者だけでなく、メンバーが連れてきた友人が協力する、見学者が参加するなど、プログラムの外ともつながって共同制作が行われました。

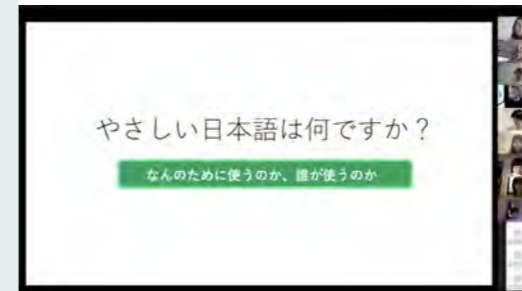


2021年

6月26日	kyodo 20_30 #1 今年度の「kyodo 20_30」のプログラムについて説明し、「やさしい日本語」についてのワークショップを行なった。ワークショップではじっさいに文章を書き換えることに挑戦。誰にでもわかりやすい表現について考えた。
7月10日	kyodo 20_30 #2 参加者と事務局で今年度やりたいことについて話し合った。
7月24日	kyodo 20_30 #3 ワークショップ「オンラインでできるあそびを作ろう」を実施。3つのチームに分かれて、それぞれが考案した「10分間でできる」遊びをやってみる。
8月7日	kyodo 20_30 #4 「せたがや国際交流センター」をオンラインで見学する。職員の方に案内してもらい、センターの取り組みについて話を聞く。
8月21日	kyodo 20_30 #5 新大久保に住み、「ルポ新大久保 移民最前線都市を歩く」を書いたライターの室橋裕和さんをゲストに招く。新大久保に住む外国人や日本人の暮らし、関わりについて話を聞いた。
9月11日	kyodo 20_30 #6 #5に引き続き、室橋裕和さんをゲストに招いた。#5でのレクチャーを踏まえ、綾田さんと室橋さん、楊さんが新大久保をお散歩。#6では、そのお散歩中に撮影した自撮り動画を見せながら他の参加者に新大久保の経験を共有した。
9月25日	kyodo 20_30 #7 写真を使ったワークショップを行った。それぞれが「(国)境」をテーマに持ち寄った写真について話し、一つの分布図の上に分類してみる。
10月9日	kyodo 20_30 #8 #7に引き続き、写真を使ったワークショップを行なった。じっさいに手を動かすと共に、「kyodo 20_30」で目指す「作品」の方向性について、ディレクターの矢野から参加者に提案をした。
10月23日	kyodo 20_30 #9 中間発表会「ここから会」を開催。参加者がお互いにお互いの興味ややりたいことを知ることを目的に、①これまでの活動で印象に残ったこと ②これからやってみたいことを一人ずつ話した。
11月13日	kyodo 20_30 #10 初めての対面での開催。集まった全員で経堂の街歩きをする。その後、経堂アトリエに集まってチーム分けをした。
11月27日	kyodo 20_30 #11 長谷川祐輔さんがファシリテーターとなって、哲学対話を行う。テーマは「制作」。
12月11日	kyodo 20_30 #12 陳さん、真理子さん夫婦に国境をまたいだ家族の暮らしについて話を聞く。陳さんの実家で暮らしている真理子さんはマレーシアからZoomを介して参加した。

2022年

1月8日	kyodo 20_30 #13 経堂アトリエに集まって、各チームで準備や制作を進める。対面での実施を前提に、会場の割り振りを相談する。
1月22日	kyodo 20_30 #14 チームごとに行動。対話を重ねる、会場の下見に行く、オンラインでのインタビューを実施する、お散歩の計画を立てるなど、各チームは順調に実践を進めていった。
2月12日	kyodo 20_30 #15 チームごとに制作を進める。全体では、成果発表会に向けてスケジュールや会場の割り振り、当日の動き、感染拡大対策などを確認した。
2月26日～27日	kyodo 20_30 成果発表会「ここから展」開催



2021年度活動記録

〈note 記事より再構成〉

#1 やさしい日本語

初回はやさしい日本語のワークショップをしました。やさしい日本語とは、日本語を外国語として勉強している人にもわかりやすい日本語の使い方です。日本に来て6年目、日本語を使い始めて6年目の事務局メンバー鄭(てい)さんがファシリテーションをしてくれました。

・まずは「やさしい日本語」について学ぶ
この日の参加者はほとんど日本語を母国語とする人たちでした。

・やさしい日本語を使ってみる
このワークショップに向けて、参加者のみなさんに宿題を出していました。日本で生活する中で必要な説明の文章を、やさしい日本語にする問題です。

・グループでチャレンジ
ポイントを勉強した後、グループで翻訳にチャレンジしました。チャレンジしたのは、「kyodo 20_30」が使う「経堂アトリエ」のホームページに書いてある文章です。

世田谷、経堂の閑静な住宅街の一角静かに鎮座する天祖神社の杜。その杜を臨む3階建ての黄色い佇まい。ご家族代々大切に住まわれていたお宅をお借りし、様々な方々にお使いいただける場。「経堂アトリエ」として活用させていただいています。様々な用途でご利用いただけると幸いです。小田急線からも臨むことができます。

3つのグループがそれぞれ「やさしい日本語」の文章を考えました。

この問題に正解はありませんが、これからも考えていきたいです。「東京で(国)境をこえる」はこれからもやさしい日本語を勉強して、使います。そしていろんな人と話し合えるようになりたいです。

#2 #3 話し合って、考えて、あそんで

2回目はメンバー同士でお互いのテーマを深め合う時間にすることにしました。「kyodo 20_30」は去年から続いているプログラムで、継続して参加している方は、(国)境について考えていることをかたちにするために、みんなと一緒に今年度1年かけて話したり行動したりします。

3回目は参加者がチームに分かれて、1時間で「10分でできる」「国境や壁を裏テーマにする」ゲームを考えました。いったいどんなゲームができたのか。一緒に見てみましょう！

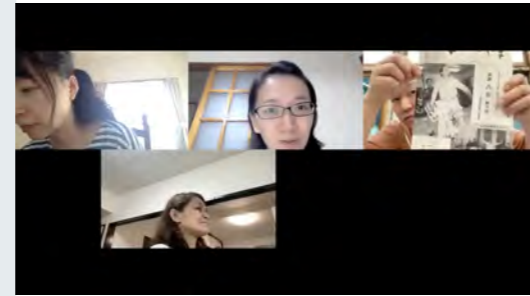
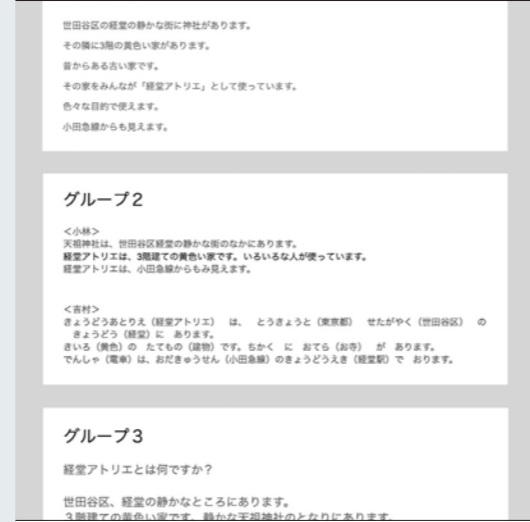
チーム①

まず、司会者が紙に書いた「お題」を見せます。参加者はお題を見たら、30秒で自分が思ったそのものを持ってきて、一斉に見せあいます。
※司会者以外のメンバーはミュートで遊びます。

〈オモイ〉

「重いもの」を持ってきた人がいます。「思いついた」みたいなものを持ってきた人もいました。日本語で同じ読み方で、違う漢字・意味の言葉がたくさんあります。ここで、カタカナで「オモイ」と書いてありますが、話せない状態では、どの意味か確認できません。そもそも正解もありません。

最後、チーム①はこのゲームを作った理由を説明しました。3人の共通の思いは「自分にとっての当たり前は、実は他の人にとって当たり前じゃ



ないことがたくさんある」ことです。この概念をゲームに入れました。

チーム②

このチームは、物語と言語と関係ある「作文作り」ゲームを作りました。みんなで一つずつ言葉を並べていきます。単語であれば、助詞(は、が、になど)や接続詞(しかし、でも、そして)など何でもいいです。順番が決まったら、早速始めます。

〈私たちが作った作文〉

何ということでしょう／メガネのつる／折れた／ので／私も／メガネのつるを／折ってみたが／やっぱり／このまま使いたくなくなった／ので／スーパーマン／なのだろうか／接着剤の力は／信じているけれど／もしも／食べたら／いや、やっぱり食べたくない／でもやっぱり食べたいかな／ちょっと一口／もう一口／あ／おいしい

チーム③

このゲームでは、みんなが家にある食材をとって、画面の前に見せます。みなさんが持ってきた食材は全部違います。その後、司会者がもう一つ指示を出します。「これからランダムに二つのチームに分けて、チーム内で今持っている食材を使って、料理の一つを考えてください。作り方と料理の名前の説明も必要です」

発表が終わったら、チーム③はゲームの発想について話しました。最初は「借り物競争」を思いつきました。冷蔵庫の食材を使うことを決めたのは、リアル対面だと絶対に食材を持っていないからです。ですから、これは家にいるからこそ遊べるゲームでした。



#4 せたがや国際交流センター見学

4回目は、三軒茶屋にある、せたがや国際交流センター（愛称：クロッシングせたがや）を見学しました。事務局メンバーの小林さんと鄭さんが訪問して、オンラインでつないでくれました。

クロッシングせたがやでは、世田谷区に住む日本人と外国人と一緒にまち歩きをしたり、やさしい日本語で交流したりするイベントを行っています。世田谷区での生活に役立つ、行政、生活、文化などの情報を提供しています。また、生活で困っていることがあるとき、相談できる場所を教えてください。

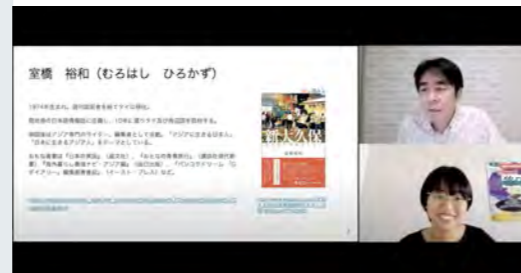
クロッシングせたがやは、世田谷区に住む外国人が増えたことや、東京オリンピックが決まったことなどをきっかけに作られました。活動が始まったのは2020年4月でしたが、新型コロナウイルス感染症の流行のため、この施設は6月にオープンしました。オープンしてまだ1年と少しなので、訪れる人のほとんどが日本人です。外国人の友達が欲しい人、ボランティア活動をしたい人からの問い合わせもあります。少しずつ時間をかけて、世田谷区に住む外国人のみなさんに来てもらえる場所にしていきたいと岡田さんはおっしゃっていました。

「信頼関係を少しずつ築いていく」という言葉がとても印象的でした。訪問終了後、思ったことや感じたことを共有しました。

私たちの目標は、私たちみんなの「居場所」を作って、そこで集まって、みんなが暮らしやすい東京を考えることです。そのために、まずは顔の見える小さなつながりを作ることが大切だと、今回の活動を通して感じました。

#5 #6 多文化の街「新大久保」を知る

5・6回目は、ゲストと一緒に、いろいろな国籍や文化を持つ人が一緒に生活する街「新大久



保」について考えました。ゲストは、ライターの室橋裕和さんです。室橋さんは、新大久保に住んで『ルポ新大久保 移民最前線都市を歩く』という本を書きました。

室橋さん「約10年間住んでいたタイから日本に帰ってきて、外国人がとても増えていたことに興味を持ちました。労働者として、留学生として、日本に住んでいる外国人は、日本に住んでハッピーなのが気になりました。いろいろな外国人のコミュニティを調べたところ、「新大久保」が挙がってきたので、腰を据えて取材するために新大久保に引っ越ししました」

新大久保にたくさんある各国の食材店や、インフラとしての送金屋さんの話、そして、コロナ禍で新しく入ってくる外国人がいなくなり、2000人程減ったという話を聞きました。

室橋さん「人はやっぱり集まりたくなるようで、ヒンドゥー教やイスラム教、仏教などの施設がたくさんあります。たとえば、ヒンドゥー教の集まりは月曜の夜に行われていて、いろいろな理由（話したい、お祈りのため、ご飯を食べたい）でみんなが集まってくる。儀式の後にはみんなで飯を食うというのは世界共通です」

国や宗教など、同じルーツや文化を持つ人たちが集まって、一緒にご飯を食べたり、お祈りをしたり、ただ話をしたりする。そういう場所は「リラックスしていただける場所」なのだろうなと思いました。ただ、そういう場所が住宅街と近いこともあって、騒音などの問題が起こることがあると室橋さんは言っていました。

習慣や文化が違うとぶつかりあうこともあります。そのため、商店街に入っているいろいろな国のお店が、2ヶ月に一度「4カ国会議」という会議をしています。その発展として新大久保フェス

が行われています。日本のお祭りも行われています。お祭りの写真では、みんなが好きな格好をして踊るなど、とても楽しそうでした。

#7 #8 写真で(国)境を考える

7回目は参加者が事前に「(国)境」を感じた写真を準備して、オンラインホワイトボードに貼りました。過去撮った写真から選んだ人がいて、フリー素材で探した人もいました。もちろん、今回のワークショップのため、じっさいにまちを歩いて、感じた「(国)境」を撮った人もいました。

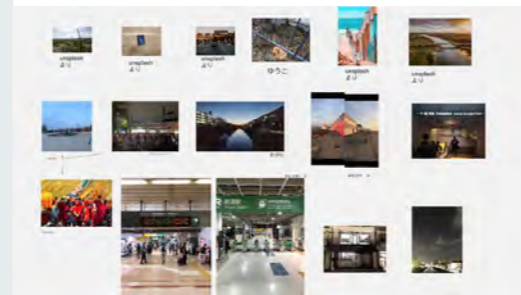
それぞれの写真を見て、それがどんな写真を考えてみました。写真を用意した人が、なぜこの写真を選んだか、どこに「(国)境」を感じたかについて話しました。

8回目はチームになって一つの作品を作りました。前と同じで、写真を使っています。作品を見ながら、みんなバラバラのことを話しました。まとまりはありませんが、みんなが写真を図像として見て共通点を探してみたり、写真の内容について他の人の意見を聞いたりしました。また、何か気づいて、それを話して、考えることもできました。

気づいたことは、作品を作るために時間がたくさん必要になることです。作業を十分にしたり、相談をしっかりとしたりするには、その分たくさんの時間が必要になります。

#9～#10 「ここから会」と「成果発表会」に向けて

9回目は「ここから会」(中間発表会)です。参加者のみなさんが、これまでの半年間で学んだこと、印象に残っていることなどを他の人と共有して、これからの半年間でやってみようことについ



て発表をしました。

それから、共同制作でみんなと一緒に作る作品は、作品を通して他者と問いが共有できるものにしてほしいと思います。なぜ一人で作るのではなく、みんなと一緒に作るのか？ それは、自分とは違う考えや感性の人がいるということ、一緒に手を動かして作品を作ることで、体験してほしいからです。

10回目は、今年度初めての対面活動です。まず、経堂アトリエに集まって、みんながこれからやりたいことを話し合いました。集まってきた人たちは、挨拶をしたり自己紹介をしたりしました。この日は、経堂駅から北側にあるすずらん通り商店街を歩きました。古くからあるお店が多いですが、最近新しいお店もたくさんできました。

経堂アトリエに着いたら「ここから会」で話してくれた計画について質問したり、みんなの話を聞いて新しい計画を提案してくれたりしました。

意味をこえる身体へ 脱中心化の制作法で映画を作る

このプログラムでは、ショットムービーを撮影しています。「ショットムービー」は英語の造語で「shot movie」と書きます。

ショット(瞬間的な断片)が重なることでできるムービー(映画)という意味で、このプログラムで制作する作品の特徴を表現しています。あるいは、単体では意味を持たないショットが重なることで必然的にムービー(物語)になってしまうという現象も示しています。

このプログラムのコンセプトは「意味をこえる身体」です。意味を伝える記号としての身体ではなく、他者と共存する世界そのものを映像に撮る

ことを目指しています。

その中で重要なテーマになっているのは、「脱中心化」の制作法です。通常、映像作品では監督や編集者の一方向的な意図を俳優が反映するように制作され、監督や編集者の意図が強く反映されます。しかしショットムービーでは、そうではない方法で共同制作を行います。

『八月対談録』制作記録

ショットムービープログラムは2020年から始まりましたが、新型コロナウイルス感染症の流行のせいで一年ぐらい対面撮影ができませんでした。その期間に「役作り」を趣旨に遠隔で作られた映像作品が『八月対談録』です。

最初に決まっていたのは、登場人物の職業と社会関係だけです。そのベースの上に、俳優の身体性に基づいて、制作組と俳優組が共同作業でキャラクターとストーリーを作っていきます。

俳優組の仕事は、俳優同士によるオンラインでの対話、制作組のインタビューに答えること、対面で撮影することです。オンラインでの対話を通じて、プロフィールや人間関係に厚みを出すことを目指します。その上で、十分に関係性が発展した段階で対面での撮影を行います。制作組の仕事は、プロットを作ること、セリフを書くこと、演出、その他制作に関する作業全般です。

役作りは以下の3つの方法を用いて同時に進行了ました。

- 1) プロットに基づいて行われたキャラクター同士のオンラインでの接触
- 2) 俳優の自撮りによって記録されたキャラクターの日常生活
- 3) Twitterを通して作られたキャラクターのメタバース(キャラクターが生活している虚構の宇宙)



『八月対談録』の制作で意味をこえる身体にアプローチする演技、演出法について、いくつか気づいたことがあります。

- 1) 対談するときに、俳優の姿勢が変わると、話の内容と話すニュアンスが変わります。
- 2) 受け身の俳優の方が、「この人」性が現れやすいです。
- 3) 俳優が自己表現しようとするときに身体より意味が先行するようになります。逆に相手役の反応に応じて行動するときはその人の身体性が現れます。
- 4) キャラクターのオンライン接触とTwitterでのメタバースは虚構ですが、現実と同じように他者と接するとき初めて「自己性」を発見するようになります。
- 5) 自撮りとTwitterでメタバースを作ることで、キャラクターの厚みが出てきます。そして、物語が誰も予想できない方向へ発展していきます。
- 6) Zoomは意味伝達のために使われることが多いですが、機械の目を持っている意味では時間と身体を記録することもできます。

2021年度の「kyodo 20_30」の活動記録は、やさしい日本語を導入して、事務局の全員がローテーションで書き、noteに掲載しました。その後、FacebookやTwitterで告知と宣伝を行いました。



「東京で(国)境をこえる」note



おがわ じょーじ

役者です。地域密着型一人演劇ユニット『赤キノコ山と蒸したお酢』のプロデュース/脚本/演出。演劇に触れる機会を増やし、より広く浸透させるために、地域に向けた活動を行っています。「雑草魂」「好きこそもの上手なれ」の言葉を部屋の壁に貼りつけて、時折ながめています。面白そうなものには飛びついて、いろんな創作を体験していきたいです。2021年度「kyodo 20_30」参加者。

くさんあり、やさしい日本語がどんなものかを知れました。ライターの室橋さんへのインタビューでは、新大久保の街で文化のちがう人たちがどのように共に暮らしているのかを知れました。写真や映像を見ながら、実際に体験してみたいと感じました。「(国)境」がテーマのチーム制作で、写真を何枚か出しあいました。一人ひとりの感じ方・イメージのちがいを知れました。そこから、実際に成果発表会に向けて共同制作をするようになりました。チームになった人とじっくり話しあい、目の前にいる人を少しだけ知れました。とても素敵な時間でした。

「知りたい」と思える場所は、珍しいような気がします。参加者の方々全員を知れなかったのが心残りですが、「kyodo 20_30」にはやさしい雰囲気がいっぱいありました。だからこそ、色々な背景のある人が参加して、目の前にいる人と対話をして、お互いの価値観を理解していき、きょうどうできるんだと思います。そんな場所に居れて、良かったです。ありがとうございました。

僕は去年（2021年）の7月に「kyodo20_30」を知って、参加しました。「見えない(国)境」ということばが響きました。きっと、コロナと一緒に生活して1年と少しの間で、人と人との間にある壁や境を体験したからだと思います。

2021年5月から今年の2月まで、さまざまな方をゲストにお迎えしたりして、「見えない(国)境」についてのお話やワークをしてきました。途中参加ということもあり、始めはもじもじしていましたが、参加者のみなさんと一緒に時間をすごして、少し打ちとけた気がしました。僕とみなさんの間にあった「境」がなじんで、居心地の良い場所になっていく感じがしました。

目の前にある「知らないところ」はきっと「境」で、「知る」ことで少しずつなくなっていくんじゃないかと思えました。「知りたい」という心の姿勢が「境」をこえる力のみなもとな気がしました。僕はこのアートプロジェクトに参加して、知らないところをたくさん知れました。

やさしい日本語ワークショップでは、なじみのない人たちには伝わりにくい日本語が街の中にした

こ せつねい

出身は中国・上海である。学部ではファッションデザインを専攻し、大学4年次、中国の社会問題を示した舞台作品に携わり、インターンとして舞台美術と衣装の制作を担当した。その時から立体的なものに興味を持ち服以外の作品の制作を開始した。より広い表現方法を求め、現在は現代美術作品として、自らのアイデンティティに目を向け、布を媒体にしたインスタレーションや映像作品を制作し、個展を開催するなど作品発表を続けている。2021年度「kyodo 20_30」参加者。



私が「kyodo 20_30」を知って参加したのは、友人から聞いた情報がきっかけである。自分自身、普段からアートプロジェクトを行っていることもあり、またこれまでの自分の作品や研究も「kyodo 20_30」の扱っているテーマに関係していたので、「kyodo 20_30」に参加した。

留学生としての参加だったので、最初は、実はいろいろと不安なこともあった。私は日本に来て1年目で、日本語はまだ流暢ではなかった。しかも、オプトインしたのはプロジェクトの途中からだ。そのため、「kyodo 20_30」のみんなとコミュニケーションを取りながら、作品を制作できるかどうか心配していた。幸いなことに、「kyodo 20_30」のみんなが私の気持ちに気づいて、やさしい日本語を使ってくれたので、コミュニケーションはとてもスムーズに行うことができた。自分の考えを少しずつ発表したり、留学生という立場から作品への思いを伝えたりすることもできるようになった。私が参加した数回のイベントの中で、ライターや、他分野のゲストを何人か呼んで一緒に議論し、あらゆる方面の知識を蓄え、

アイデアを得ることができて、その後の作品制作にも役立った。

「kyodo 20_30」で活動した期間では、文化も生活習慣も違う他国の人たちと、アートに興味を持って一緒に仕事ができただけが、一番印象に残っている。アートには、みんなをひとつにする力があるので、これがアートプロジェクトの存在意義なのでしょう。いろいろな人のいろいろな考えを聞くことができ、将来の自分の作品作りにとっても、他の人と一緒に作品を作るときにも、実はとても役立つ経験になったと感じている。また、活動の期間中は、国籍や文化、宗教の異なる人々が東京でどのように共存していくのか、この問題に関心を持ち、アート作品を通じて提示しようとしている人々がいることに気づかされた。ここで重要なのは、「kyodo 20_30」の全員が、美術を勉強しているわけでも、現在、作品を制作しているアーティストでもないということだ。「kyodo 20_30」には学生や他の業界で働く人がいた。

今回、大変勉強になったので、今後も機会があれば参加させていただきたいと思っている。

ここから展
 (2022)

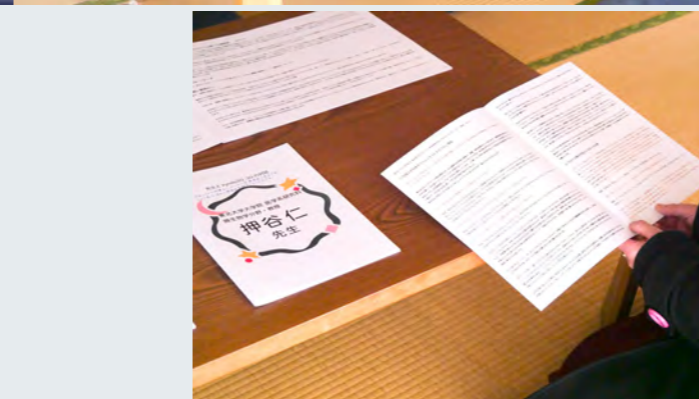
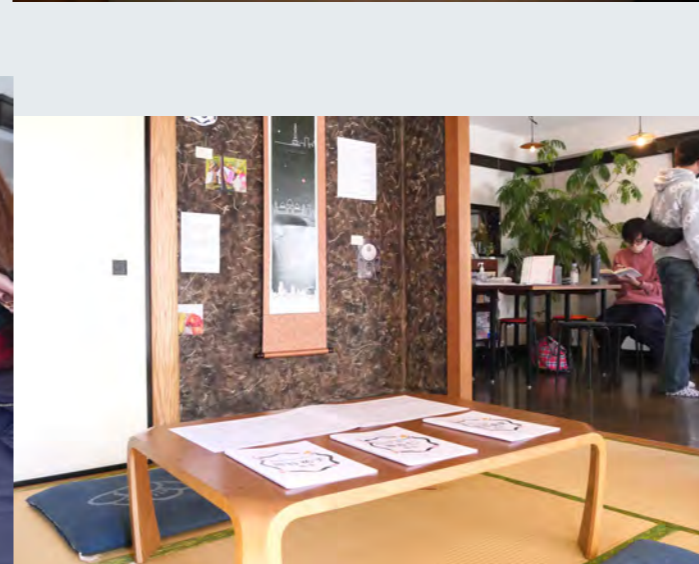
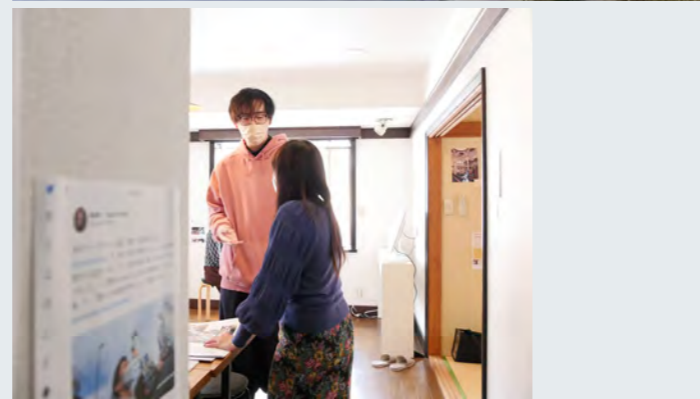
活動概要

2021年度の「kyodo 20_30」の成果を「ここから展」で発表しました。5つのチームの作品を展示することで、参加者が「kyodo 20_30」を通して、さまざまな目に見えない壁や境界線について得た気づきや問いを、プロジェクトの外の人に共有しました。

5つのチームは、それぞれメンバーやチームの構造が異なります。例えば、2020年度の「kyodo 20_30」の活動で得た問いを新しいメンバーも交えて継続して探求したチーム。一人が考えた案に、賛同する人々が集まって制作をサポートしたチーム。「kyodo 20_30」の参加者として出会い、互いに異なる二人の違いを見つめることを作品にしたチーム。それぞれの展示作品や制作過程には、異なるもの同士が個性を擦り合わせながら協働した痕跡が現れています。

〈開催概要〉

kyodo 20_30 成果発表会「ここから展」
 会期：令和4年2月26日（土）、27日（日）
 11:00～20:00
 会場：経堂アトリエ、マホラ食堂 2F



作品 1

『像』

経堂の商店街の片隅で、お互いを何も知らない状態で、通行人と作家が第一印象だけで擬人像（似顔絵）を描きます。途中、短い休憩を取ったとき初めて二人は、お互いの国籍や宗教、文化的背景、年齢、職業などの情報を交換します。休憩後、二人は先ほどのペインティングを続けます。活動の様子を記録した映像と、実際にその場で描かれた似顔絵をあわせて、当日会場で展示しました。

展示会場：経堂アトリエ

参加メンバー：胡雪寧、長谷川祐輔、ゆう、鄭禹晨、矢野靖人
 協力：胡征宇、呂青、蔣雯、くろねこドーナツ、祝立志

作品 2

『だから、ここにいる』

コンビニ、スーパー、病院。日本の様々な場所で外国籍の方々が働いているのを見かけます。それはごく当たり前の日常ですが、遠い国からやってきて日本で働くというのはどんな感じなのでしょう。私（柴田早理）から見ると日本はなんだか画一的で、宗教にも異文化にも理解が深まっておらず、外国人には暮らしにくい国に思えます。日本に来て日本語を学ぼうとしている方々にはどう見えているのでしょうか？日本語学校の学生、先生達との対話から、今回の作品を作りました。今後の多文化共生について考えるきっかけとなれば幸いです。

展示会場：経堂アトリエ

参加メンバー：柴田早理、aqiLa、桐葉恵、長谷川祐輔、阿部七海
 協力：一般財団法人東北多文化アカデミー

作品 3

『新大久保お散歩学派』

俳優の綾田将一が、繰り返し、いろんな人と新大久保をお散歩しました。アリストテレスが散歩しながら講義したことから、彼の弟子たちは「逍遥学派」と呼ばれるようになったそうです。学びは体感とともにあり、常に過程にあるとでも言っているようではありませんか。お散歩すれば、体が変わり、街の見え方が変わります。そのプロセスを、お散歩の副産物とともにシェアしました。

展示会場：経堂アトリエ
 参加メンバー：綾田将一、室橋裕和、阿部七海、楊淳婷、Roy Taro、胡雪寧、桐葉恵、柴田早理



『ワークショップお散歩学入門』

「kyodo 20_30」を通して得た“お散歩論”を、お散歩学派がおすそ分け。二つの会場をつなぐ、お散歩をデザインするワークショップです。経堂アトリエからマホラ食堂までお散歩しました。着いたらそのまま、「意味をこえる身体へ」を観るもよし。「ここから展」と経堂の街を楽しみ尽くしました。

集合場所：経堂アトリエ 2F
 解散場所：マホラ食堂 1F
 参加メンバー：綾田将一、寺門信、桐葉恵



作品 4

『意味をこえる身体へ』

ショットムービー①+②

「ショットムービー (shot movie)」は、物語と身体性の緊張関係を意識して制作しています。ショット(瞬間的な断片)——俳優の身振り、表現、話法など——に焦点をあてつつ、それらが重なることでムービー(映画/物語)になる瞬間を見極めながら実験的に創作しています。人はどんな時に物語を読み取るのか。そこで物語や意味を構成しているエレメントは何なのか。

ここから展では、2021年8月にリモートで作られた作品①『八月対談録』と、2021年9月～12月まで対面撮影で制作された作品②『変奏』の連続上映を行いました。制作のなかで得られた気づきを来場者に共有するために、メンバーによるトークイベントも開かれました。

上映会場：マホラ食堂 2F
 参加メンバー：蔭婁、長谷川祐輔、矢野靖人、富高有紗、綾田将一、aqiLa、桐葉恵、川淵優子、呉楽、Lê Hai Ly、董敬



作品 5

『共鳴するもの』

「翡翠の太陽」をモチーフに活動を続ける画家の Roy Taro が俳優のオガワジョージの身体にライブパフォーマンスとしてボディペインティングを行いました。ボディペイントは古い時代から私たちの暮らしにありました。オガワは自分の体で感じるものを身体の動きとして表現します。俳優は何をするにも自由です。ペイントから逃げることもできます。パフォーマンスが終わったとき、ふたりの人間はどのような新しい関係を得ているのでしょうか。

上演会場：経堂アトリエ
 参加メンバー：Roy Taro、オガワジョージ、川淵優子、奥田隼平



撮影：奥田隼平

意味をこえる身体へ…ショットムービープログラム (2021)

活動概要

「意味をこえる身体へ：ショットムービープログラム」は、2021年度の「kyodo 20_30」のフリンジプログラム*です。2021年の5月から2022年の2月まで、「kyodo 20_30」と並走して、企画者の蔣雯を中心に2本の「ショットムービー」を制作しました。

「ショットムービー (shot movie)」は、このプログラムで制作される、ある特徴を持つ映画を指す言葉です。ある特徴とは、ショット(瞬間的な断片)が重なることでできるムービー(映画)の制作を行うということです。あるいは、単体では意味を持たないショットが重なることで必然的にムービー(物語)になってしまうという現象を示します。

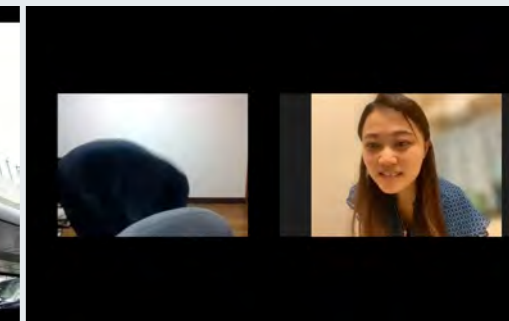
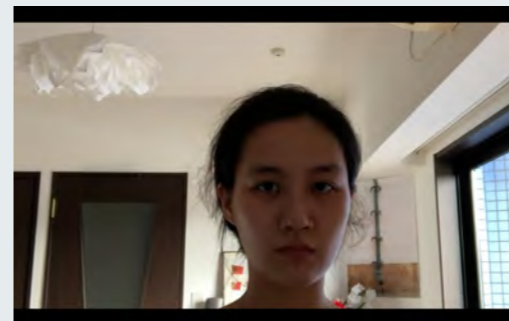
このプログラムのコンセプトは「意味をこえる身体」です。意味を伝える記号としての身体ではなく、他者と共存する世界そのものを映像に撮ることを目指しています。その中で重要なテーマになっているのは、「脱中心化」の制作法です。通常、映像作品では監督や編集者の一方向的な意図を俳優が反映するように制作されるため、監督や編集者の意図が強く反映されます。しかしこのプログラムでは、そうではない方法で共同制作を行いました。

「ここから展」では、2021年8月にリモートで作られた作品①『八月対談録』と、2021年9月～12月まで対面撮影で制作された作品②『変奏』の連続上映と、関係者によるトークを行いました。

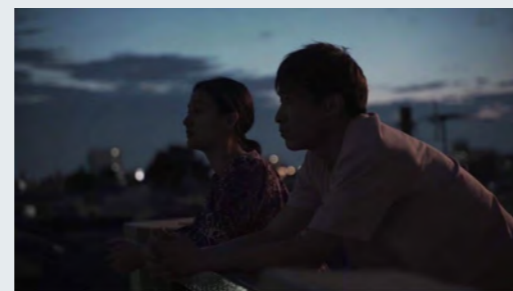
*2020年度以前から参加しているメンバーが中心となって進めるプログラム。「kyodo 20_30」の開始とともに始まり「ここから展」までを並走しました。より長期的な共同制作の場として思考と実践を重ね、そこで得た知識や手法を「kyodo 20_30」へ共有していく役割を果たしました。



〈STAFF〉
制作代表：蔣雯
プロデュース：長谷川祐輔、矢野靖人
俳優組：富高有紗、綾田将一、aqiLa、桐葉恵、川淵優子
プロット組：長谷川祐輔、蔣雯
撮影：具楽
撮影助手：Lê Hai Ly
編集：董敬
特別出演：蔣雯、長谷川祐輔、阿部七海
Special Thanks：井上明日香、Ash、千成不動産、アートアクセスあだち 音まち千住の縁



『八月対談録』より



『変奏』より



じゃん うえん
俳優／映像作家 東京藝術大学大学院映像研究科博士課程在籍。
2020年度「kyodo 20_30」コラボレーター、「意味をこえる身体へ：
ショットムービープログラム」代表。

2019年、私は「東京で(国)境をこえる」ディレクターの矢野靖人さんから声をかけられて、プロジェクト映像部門のコラボレーターを務めました。その1年後、プロジェクトの延伸として、映像作品の制作を目標とする「ショットムービー」プログラムが起動しました。この時期、私は東京藝術大学映像研究科で「詩的身体」をテーマにして研究していましたので、「ショットムービー」の制作理念に「詩的身体」の研究理念が色濃く反映されていました。

具体的に言いますと、私の研究テーマである「詩的身体」は「映像における意味からはみだした身体」と定義されています。一種の「非-意図性」を追求する美学ですが、「ショットムービー」の制作理念はその美学追求に沿って、同時に脱中心的な、意味をこえる身体を映像に収めようと求めるものでした。

「ショットムービー」の制作プロセスでは、プロットと人物関係が事前に作られています。従来の脚本と監督が中心となって制作する自律的な

「映画作品」を目指しているのではなく、寧ろ他者との共同制作によって、中心を作る「意図性」と中心から離れてしまう「非-意図性」との間で絶えず揺れているダイナミズムを記録したものになりました。

ショットムービーの制作活動を通して感じたのは、映画を撮る側が一方向的に意味を押し付けることをやめると同時に、撮られる側の俳優と見る側の観客の意志がフレームの中に侵入するドアが開けられたのではないかと。つまり、映画の制作側も見る側も、映画を「体験する」ようになる。いつか技術が十分に成熟した日が来たら、撮られる側と見る側の意志が実体としてフレームを越えて、映画は一種の「メタバース」になるでしょう。その時、映画は意味の境をこえられるのではないのでしょうか。私が、これからもショットムービーの制作を続けたいのは、このような映画のユートピアを見たいからかもしれません。

「東京で(国)境をこえる」の活動の感想としては、話が飛び過ぎましたね。

はせがわ ゆうすけ
新潟大学 博士前期課程2年 哲学(美学、現代フランス哲学)。「東京で(国)境をこえる」準備会に参加、2020年度「kyodo 20_30」コラボレーター、2021年度「kyodo 20_30」フリッジプログラム「意味をこえる身体へ：ショットムービープログラム」プロデューサー、脚本執筆など。



「ショットムービー」は、代表の蔣雯さんの研究テーマ、関心から来ている言葉です。「東京で(国)境をこえる」のフリッジプログラムとして本格的に撮影が開始できたのは、2021年の7月末からでした。活動の詳細については、雯さんやわたしが執筆したnoteの記事を参照して頂けますと幸いです。¹⁾

「ショットムービー」という言葉について簡単に説明しておきます。ショットムービーはshotとmovieの組み合わせから成る造語です。予め物語を設定しないで、俳優同士の個別の対話や映像(ショット)を掻き集めてつなげていくことで、そこに生成していく物語(ムービー)を見つめていこう、という意図が込められています。

ショットムービーに参加する中で一番考えることが多かったのは、人間関係についてです。アートプロジェクトの一貫として行われているこのプログラムは、条件が万全に整った上ではじまったわけではありません。立場や制作条件など、手探りで進める部分が多かったです。そんな中で、なぜ大変な思いをして自分はこのプロジェクトに関わっているのかと考えることがたくさんありました。そこで自分を引き止める要素だったのが、雯さんと対話する中で浮かび上がってきた人間関係についての価値観です。

雯さんは俳優としてのキャリアがあります。これまで彼女が参加した映像制作の多くでは、一本

の作品を撮影するごとに人間関係がリセットされ、継続的な人間関係ができていかなかったそうです。そんな中、このアートプロジェクトに参加した動機の一つとして、制作を経由した継続的な人間関係を作りたいという動機があるという話を2021年の夏に伝えてもらいました。改めて振り返れば、雯さんとのこの持続的な人間関係についての対話一つが支えとなって、自分は今もショットムービーに関わっているなという気がしています。²⁾

わたしはこのプロジェクトに、プロデューサーの立場として参加しています。普段は大学院生として20世紀のフランス哲学と美学の研究をしています。映像作品を作ることも、プロデューサーという立場で制作に関わることも初めての経験でした。肩書きはともかく具体的に自分がこのプロジェクトで担当していた仕事は、①脚本執筆、②俳優へのインタビュー、③制作の協力全般、④代表の雯さんがその都度言いたいこと／考えていることを人に伝えるように整理すること、などです。今——2022年2月6日現在——でも、わたしは何をすることが映像制作のプロデューサーの仕事に該当するのか分かっていません。ですが、①～④の仕事をもってプロデューサーと言えるのであればそれなりに貢献できた手応えがあります。

2022年4月以降、自分にできることをやりつつ参加メンバーのみなさんと協力して、息の長いプロジェクトにしていければいいと考えています。

1)『ショットムービー制作ノート——8月から11月まで』意味の境をこえる身体へ のきろく #3



2)『無意味なものを本気で作ること——「強制終了」の時代に』意味の境をこえる身体へ のきろく #5



新大久保お散歩学派
(2021)

活動概要

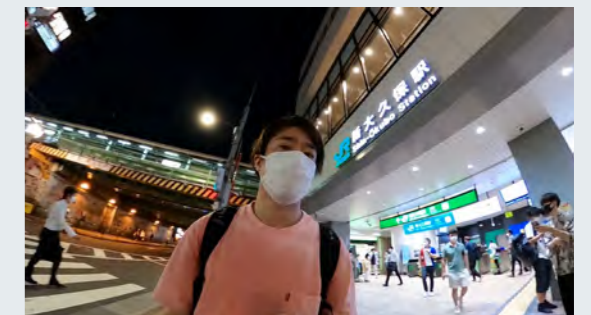
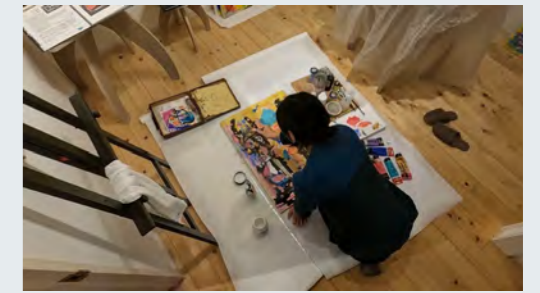
「新大久保お散歩学派」は、2021年度の「kyodo 20_30」のフリンジプログラム*です。2021年の5月から2022年の2月まで、「kyodo 20_30」と並走して、企画者の綾田将一が新大久保で散歩を繰り返し、その記録を作成しました。この企画が始まった時点では「お祭りと身体でつなぐ東京の(国)境」という名前でしたが、「kyodo 20_30」のプログラムの中で新大久保を歩き、その場所が(国)境を体感できる場所であると知ってからは、「新大久保お散歩学派」に名前を変えています。

このプログラムのゴールは、俳優・綾田将一が異文化を「私の事」として体感し、その身体の様子を見せることで、他者に同様に「私の事」として体感してもらうことです。

綾田が異文化を体感できる場所として、新大久保をリサーチの対象にしています。そのきっかけは、新大久保に詳しいライターの室橋裕和さんと一緒に新大久保を散歩したことにありました。室橋さんと歩き、その経験を他の参加者に共有するために動画を制作したことで、綾田は新大久保を身近に感じるようになり、新大久保をもっと知りたい／知ってもらいたいと思うようになったと言います。

「kyodo 20_30」の参加者は、綾田との散歩を希望したり、巻き込まれたりして、綾田と一緒に新大久保を歩きました。一緒に歩く人によって散歩のルートは異なり、散歩の経験が積み重ねられるたびに綾田の身体は変化します。成果発表会「ここから展」では、様々な散歩の記録を「新大久保お散歩学派」の展示スペースにまとめるのではなく、それぞれ散歩をした相手の展示スペースのそばに展示しました。また、綾田と二人のメンバー、来場者で「ここから展」の2つの会場の間を散歩するワークショップも行いました。

*2020年度以前から参加しているメンバーが中心となって進めるプログラム。「kyodo 20_30」の開始とともに始まり「ここから展」までを並走しました。より長期的な共同制作の場として思考と実践を重ね、そこで得た知識や手法を「kyodo 20_30」へ共有していく役割を果たしました。





あやだ しょういち

俳優。早稲田大学第一文学部在学中に演劇活動を開始。reset-Nを経てフリーランス。劇団桃唄309やTheatre Company shelfなどに客演するほか、フランス・シンガポール・オーストラリア・マレーシア・イタリアなどと国際共同制作に取り組む。NPO法人中野ケアセンター terraceにて文化庁のコミュニケーション教育事業や、ピースセルプロジェクトにてイラクの平和教育支援など、国内外でワークショップも行う。2020年度「kyodo 20_30」コラボレーター、2021年度「kyodo 20_30」フリンジプログラム「新大久保お散歩学派」代表。

が続きメンバーが定着しなかった。

そんな折、室橋裕和さんのご案内で新大久保をお散歩する機会を得た。新大久保で起きていることがお祭りのように見えて、私の身体も変わった。新大久保を、誰かを誘ってお散歩しよう。昨年度、環境チームで追究した“お散歩論”があるじゃないか。幸いなことに「kyodo 20_30」も対面が再開して、作品づくりの中心となる新たな参加者にも出会えた。彼らを誘ってお散歩すれば、彼らのつなぎ目になれるかもしれない。

そんなこんなで『新大久保お散歩学派』だ。ふざけた名前だが、一貫している。私にとって、お祭りは人が集いコミュニティを攪拌する場であり、お散歩は身体を通して他者とのつながりを取り戻す方法である。〈お祭り〉が〈新大久保〉に、〈身体〉が〈お散歩〉に、変わったただけだ。ただし〈綾田將一の〉は〈綾田將一と仲間たちの〉に変わった。新大久保と、仲間たちと、少しはつながれたのではないかと思う。

私は今、私たちのお祭り「ここから展」を前に本稿を書いている。私たちは未だ、終わらないお散歩の過程にある。ここから、こえていくのだ。わざわざ、わざわざ。

むろはし ひろかず

1974年生まれ。週刊誌記者を経てタイに移住。現地発の日本語情報誌に在籍し、10年に渡りタイ及び周辺国取材する。帰国後はアジア専門のライター、編集者として活動。日本でもとくに多民族集住が進む東京・新大久保に在住。「アジアに生きる日本人」「日本に生きるアジア人」をテーマとしている。おもな著書は『ルボ新大久保移民最前線都市を歩く』（辰巳出版）、『日本の異国：在日外国人の知られざる日常』（晶文社）、『ルボ コロナ禍の移民たち』（明石書店）、『おとなの青春旅行』（講談社現代新書）など。「kyodo 20_30」#5、#6にゲストとして参加した。



「新大久保は多様性の街、多民族集住の街」なんてよく言われる。人口の40%弱が外国人で、しかもその出自はネパールやベトナム、韓国、中国、タイなどなど多岐にわたる、けっこうな「国際社会」だから、そう表現されるのだろう。僕はそんな新大久保に住み、記者として街の姿を発信しているのだが、つねづね感じていたことがある。

新大久保の「多様性」には、欠けているピースがある、ということだ。

なにが足りないか。それは、若い日本人の姿だ。街に多様な表情を与えているのは、おもに外国人である。地域にたくさんある日本語学校や、外国人を受け入れる専門学校に通う、さまざまな顔立ちの人々。レストランや食料店、送金会社など外国人の暮らしに必要な店、会社を営んでいるのも、外国人が中心だ。そういったところで学び、働きながら、新大久保にはたくさんの外国人が暮らす。そこに居心地の良さや、あるいはビジネスチャンスを求めて、次々と外国人がやってくる。彼らによって街の姿は急速に変わっていく。

ところが、日本人はいまひとつ元気がない。住民の60%以上は日本人で、いまもマジョリティーではあるのだが、日本のどこでもそうであるよう

に高齢化が進む。商店街の人たちも主力は中高年だ。

観光客は多いのだ。新大久保にはコリアンタウンという顔もあり、韓流ブームの中たくさんの若い人々が訪れる。しかしそれは、あくまで流行に乗って消費を楽しむだけのものだ。もう少しこう、いま多様な人々を集める磁場のようなものを発している新大久保について興味を持ち、なにか表現してみようという若い世代の日本人が出てきてくれたら……なんて思っていたところ、「東京で(国)境をこえる」に声をかけていただいた。このアートプロジェクトもさまざまな文化を持つ人々で構成されているが、日本人の20代、30代が多いようだ。

そんな世代から「新大久保を歩いてみたい」と言われ、なんだかうれしくなったことを思い出す。ちょっとでも面白いと思ってもらえればと、むしろ僕のほうが夢中になって雨の中あちこち連れまわしてしまった。

街を歩く中で、なにか表現をするためのキーは見つかっただろうか。そして今度は「東京で(国)境をこえる」の皆さんが、新大久保になにか刺激を与えてくれたら、と思う。

話しあうプログラム サカイノコエカタ (2021)

活動概要

「話しあうプログラム サカイノコエカタ」は、「東京で(国)境をこえる」の二つめのメインプログラムとして、2021年度から始まりました。

「kyodo 20_30」が「国境」というテーマに共同制作を通して取り組むのに対し、「話しあうプログラム サカイノコエカタ」は国境以外の「様々な境、壁」について“対話”という方法で取り組みました。

「話しあうプログラム サカイノコエカタ」は、自分が積極的に考えたり、関与しなかったために普段は見えていなかった、あるいは意識できなかった境界や断絶(=サカイ)に向きあい、考えるためのプログラムです。

サカイに向き合い、活動を続けている実践者(=コエているひと)をお迎えし、実践者と参加者が、顔を合わせて対話をする機会を作ります。「サカイノコエカタ」ではこの対話を少人数で行うことを重視しました。参加者定員を毎回8名に限り、会場では実践者と参加者が車座になって話し合います。「サカイノコエカタ」にとって参加者のゴールは、自分と他者の間には明確にサカイがあるということを認めた上で、自分と他者の関わり方を改めて見つめなおすことであり、実践者との対話はその手助けになりました。

第1回はローカルアクティビストの小松理虔さん、第2回はアーティストコレクティブ「突然、目の前がひらけて」より鄭梨愛さん、灰原千晶さん、李晶玉さん、第3回はノンフィクション作家の川内有緒さん、第4回はFC 越後妻有より坂口裕昭さん、元井淳さん、石渡美里さん、最終回はアートフロントギャラリーより北川フラムさんを実践者としてお招きし、参加者と共にそれぞれの“境のこえかた”について話し合いました。



会場：はぐくむ湖畔（世田谷区松原）



- 2021年
 - 12月1日 第1回「共事でコエていく」
ゲスト：小松理虔
 - 12月21日 第2回「作品でコエていく」
ゲスト：鄭梨愛、灰原千晶、李晶玉
(突然、目の前がひらけて)
- 2022年
 - 1月17日 第3回「コエカタを見続けること」
ゲスト：川内有緒
 - 2月11日 第4回「協働でコエていく」
ゲスト：坂口裕昭、元井淳、石渡美里 (FC越後妻有)
 - 2月13日 第5回「コエられなかった先へ」
ゲスト：北川フラム (アートフロントギャラリー)





こばやし まさゆき

1981年生まれ。写真家・現代美術家・展覧設計・料理人・アートプロジェクト運営など興味の赴くままに仕事を積み重ねている人。本懐は「営み」と「芸術」の再設定を考える人。現在は、大地の芸術祭の施設、三省ハウス舎監兼マネージャー的な仕事をしています。「東京で(国)境をこえる」事務局メンバー、「話しあうプログラム サカイノコエカタ」企画。

者の分断を埋めるものだとおっしゃっています。では、「共事者」であるためにはどうすれば良いのでしょうか。

それは、今回の実践から引き上げると、私と他者の間にある共通の《あそぶ・つくる・そだてる》などを媒介にし、ヒエラルキーが全く存在しない関係を再構築することでした。

そしてまた、生活の営みや彩りに関することが直接の媒介となっていることも特筆すべきです。

僕も「共事者」には非常に大きな影響を受けています。ただし、この言葉の定義はまだ定まっていないほどに新しい概念です。故に、共事の在り方にフォーマットはありません。僕は僕なりの共事を見つけ、それに指針のために名を与え、実践していこうと思います。

また、今回のプログラムを通して改めて気づかされたことは、話しあうことは、他者を知ろうとする意志の表れだということです。

「あなたをもっと知りたいから、話しあおう。」少なくともこの態度は、サカイと呼ばれる存在を、柔軟なものに変容させてくれるのではないのでしょうか。

もし目の前にサカイがあることに気がついた時、あなたの話しあおうという決断は、既に何かを変えているはずです。少し大袈裟だけれども、僕はそれを博愛の萌芽と呼ぶことにします。

かしわら ここ

1998年生まれ、東京都出身。フリーランスライター、翻訳家。上智大学国際教養学部卒業。ヴェネチア大学留学中、観測史上2番目となる水害を経験したことや、何も持たない豊かさ・物を大切にす欧州文化の中で、自然と人間の関係性や人生の豊かさについて考え始める。現在は「他者と共に生きる方法」のひとつとしてアートを捉え、物語や言葉を中心とした作品制作を進める。「話しあうプログラム サカイノコエカタ」第1回、第2回、第5回のレポートを執筆した。



「話しあうプログラム サカイノコエカタ」を通して実感したのは、人が人に関わろうとする姿は何にも代え難い美しさを持っているということでした。

他者が自分とは全く別の価値観を持っていると分かっている、そんな相手に関わろうと歩み寄るのは決して容易いことではありません。けれども、今回のプログラムに参加されたみなさんは全員「他者に関わろうとする人」という点で共通していたように思います。会場は登壇者と観客というよりも、同じ船に乗る人たちが集まる会合のような場所で、サカイノコエカタという1つのテーマについてみなさんが真剣に話し合う姿は、心の底から本当に美しいと感じられるものでした。社会での役割は関係なく、経験者がヒントを共有したり、個人的な悩みを打ち明けたりと、自分の本心を開示して受け入れてくれる人がそこにいる、そんな場があるというのはものすごく稀有で貴重なことだと改めて実感させられます。このように、相手に関わろうと工夫して歩み寄ることは、もしかすると人間にしかできないことなのかもしれません。

プログラムを重ねるにつれて分かったことは、「知りたい」という純粋な気持ちが、誰かとの間で複雑に絡まり合う紐を解き、お互いを繋げる鍵になるということでした。もちろん、時には相手に対する配慮も必要になります。けれども、今必要とされているのは、それ以前にある「今、目の前にいる相手を1人の人として好きになる」ということなのかもしれません。同じ地球に住んでいる限り、私たちはお互いを分断する相違点よりもはるかに多くの共通点を持っています。誰かを好きになることは、頭で考えるよりずっとシンプルで簡単なことであるように思います。そして、それは自ずと自分を好きになることにも繋がるでしょう。

内にある問題を解決しようとするのではなく、外の人との関わりを通してより良い社会の形を見つけていけるということ、サカイノコエカタを通してより多くの人に届けられたら嬉しいです。そして、1人の人間としてみんながお互いに信頼できるような環境がもっと東京に、そして日本中に増えていくことを心から願っています。

東京には見えない壁がある。これは「東京で(国)境をこえる」の活動当初の投げかけです。

僕は、2年と少し「東京で(国)境をこえる」の事務局長として、このプロジェクトに携わりました。その後「話しあうプログラム サカイノコエカタ」という企画を運営していくことになります。

「話しあうプログラム サカイノコエカタ」は「東京で(国)境をこえる」の投げかけに対し僕なりに起こしたアクションです。越境して活動をされている方々(この方々を実践者と呼ぶことにしています)に声をかけ、参加者との対話の時間を用意しました。

実践者との対話のなかで、自己と他者の心のほぐし方について幾度か話になりました。

そこでは以下の共通項がありました。

- ・自分の心が開いていないと、相手の心も開かない。
- ・どのような関わり方でもいいから、少しでも時を共にする。

それは第1回にお呼びした小松理度さんのおっしゃる「共事者」という考え方を、それぞれに実践されていることでした。これは大きな示唆だと感じています。

小松さんは、「共事者」とは、当事者／非当事

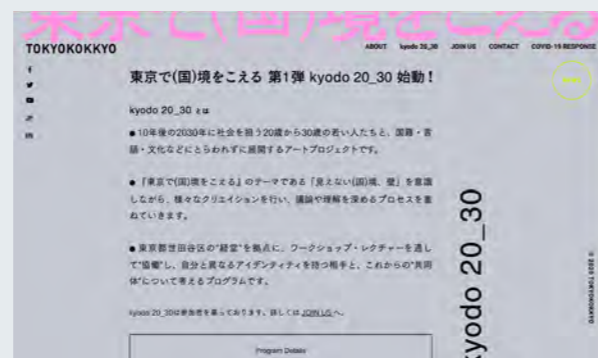
制作物

東京で(国)境をこえる

BEYOND INVISIBLE BORDER

「東京で(国)境をこえる」ロゴマーク

デザイン：三上悠里



「東京で(国)境をこえる」ホームページ (2020年度)

デザイン：三上悠里



「kyodo 20_30」制作ノート 01～04

デザイン：三上悠里

制作：一般社団法人 shelf

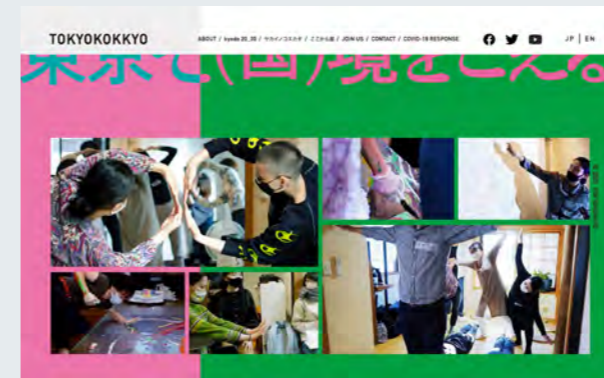
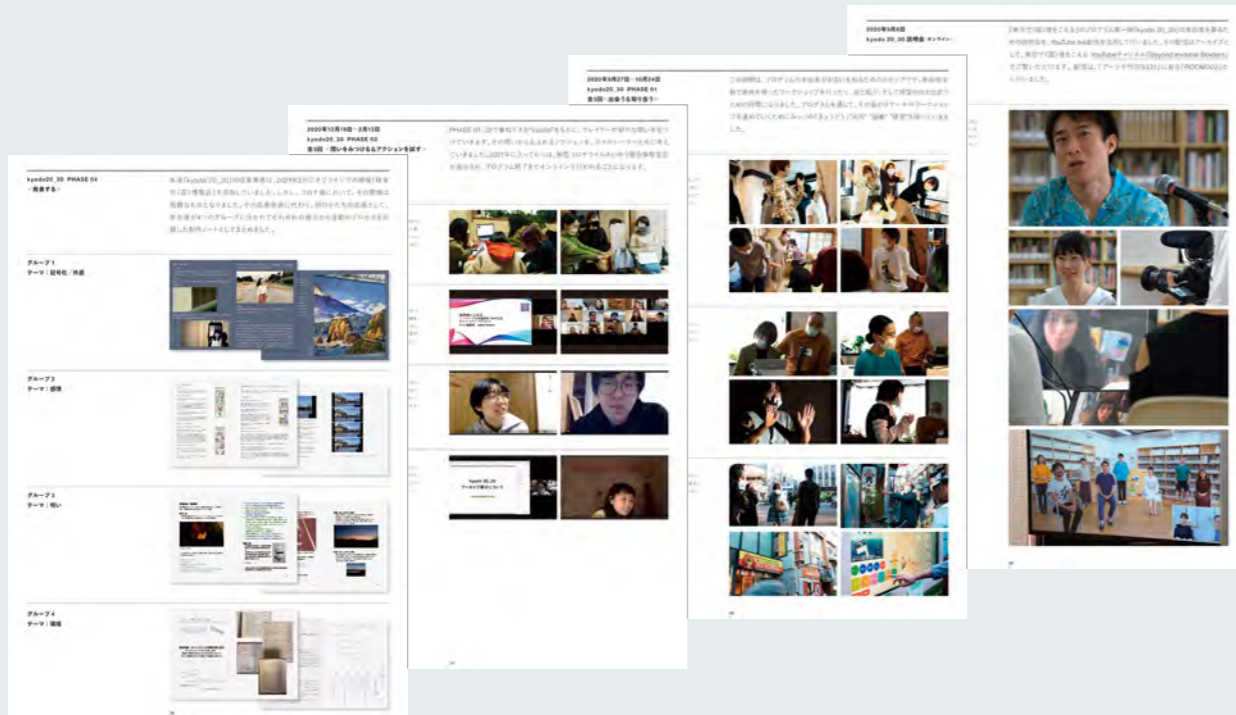
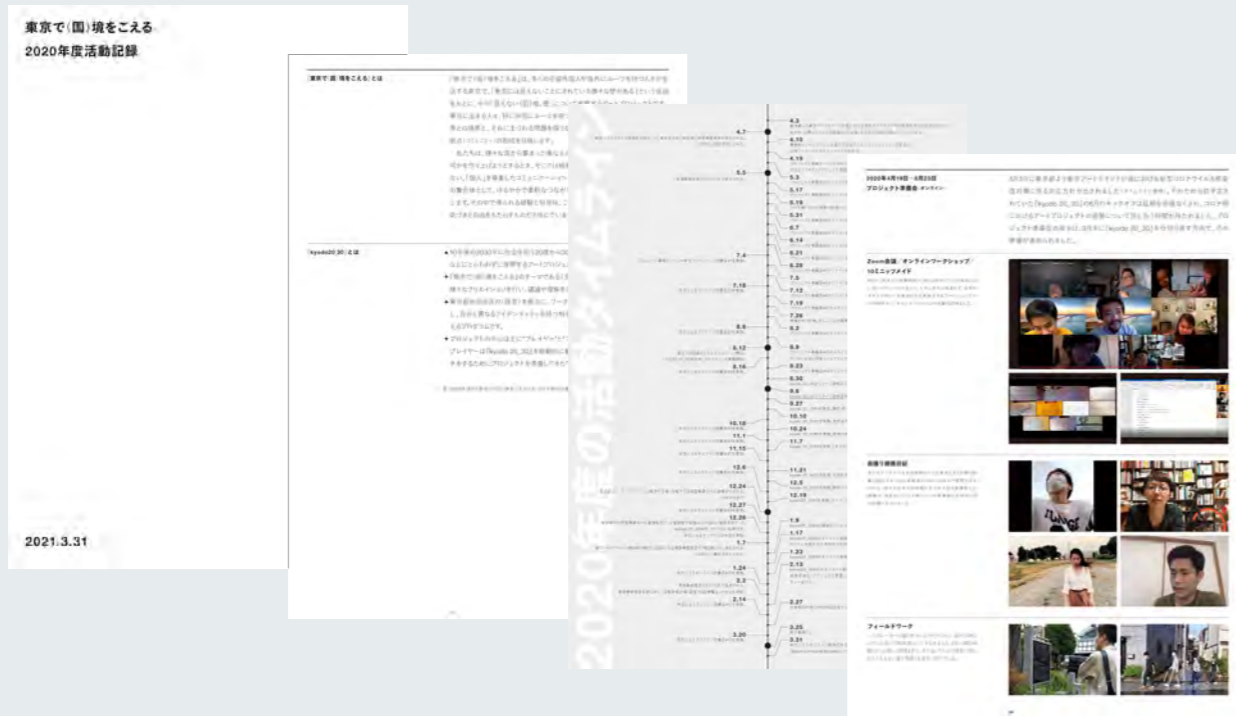
発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

中止となった成果発表会の代替として、2020年度の「kyodo 20_30」で行われた各チームのアクションを記録・公開するために制作した。TARL図書館でダウンロード、閲覧することができる。



2020年度

2021年度



「東京で(国)境をこえる」ホームページ (2021年度)

デザイン: オクマタモツ (956D)

ウェブサイトコーディング: 阿波屋鮎美 (プラン・ニュー・トーン)



「東京で(国)境をこえる」活動紹介カード

事務局や参加者が手軽に活動を紹介できるように制作した。

デザイン: オクマタモツ (956D)

「東京で(国)境をこえる」2020年度活動記録

編集委員: 寺門信 (2020年度「kyodo 20_30」コラボレーター)、
 小林真行 (2020年度「東京で(国)境をこえる」事務局)、
 三上悠里 (2020年度「東京で(国)境をこえる」事務局)
 テキスト: 寺門信 (2020年度「kyodo 20_30」コラボレーター)、
 小林真行 (2020年度「東京で(国)境をこえる」事務局)、
 矢野靖人 (2020年度「東京で(国)境をこえる」ディレクター)
 デザイン: 三上悠里
 制作協力: 川淵優子 (2020年度「東京で(国)境をこえる」事務局)

2020年度の活動記録。TARL図
 書室でダウンロード、閲覧する
 ことができる。





「話しあうプログラム サカイノコエカタ」フライヤー

デザイン：宮野祐
メインビジュアル：友杉宣大



kyodo 20_30 成果発表会「ここから展」フライヤー

デザイン：オクマタモツ (956D)



「東京で(国)境をこえる」はなんですか？ (活動紹介動画)

制作：阿部七海 (2021年度「東京で(国)境をこえる」事務局)、
川淵優子 (2021年度「東京で(国)境をこえる」事務局)、
小林真行 (2021年度「東京で(国)境をこえる」事務局)、
鄭禹晨 (2021年度「東京で(国)境をこえる」事務局)、
矢野靖人 (2021年度「東京で(国)境をこえる」ディレクター)
協力：大内伸輔 (アーツカウンシル東京)、村上愛佳 (アーツカウンシル東京)

より多くの人に活動を知らせることを目標に、やさしい日本語を使って活動を紹介する動画を制作した。画面上の文章は全て、音声でも読み上げられている。YouTubeの「東京で(国)境をこえる」チャンネルで視聴することができる。(2022年2月現在)



事務局座談会

運営ということについて

矢野 3年間の東京アートポイント計画「東京で(国)境をこえる」について、事務局のメンバーで振り返りをしておきたいと思って、今日、みなさんに集まっていただきました。よろしくお願いします。

阿部さんは、2020年度から参加してくれてましたよね。ちょうど「kyodo 20_30」というプログラムが初めて開催されて、それで一般公募で集まってもらった「プレイヤー」というかたちで参加してくれました。今年度は事務局の、しかも事務局長という立場で関わって、また同じ「kyodo 20_30」というプログラムに参加しましたが、どうでしょう？ 去年と今年で何か違いとか、印象に残っているようなことはありますか？

阿部 参加者と事務局、立場が変わることで見えているものが違うんじゃないか、ということに不安がありました。例えば、去年の私は「東京で(国)境をこえる」と、自分が参加してる「kyodo 20_30」の名前の違いすらわかっていなかった。自分が何に参加してるのかすらわからないまま参加していたけれど、今年はそれを外に向かって説明することができないといけない立場にあります。

「kyodo 20_30」に関しては、参加者がその主人公であって、参加者にどんなメリットを作れるか、どんな体験を作れるかがプロジェクトにとって一番大事なことだと考えていました。事務局という立場になると、参加者になってプログラムを体験することはできないから、去年より不安なことが多かったかなと思います。

矢野 運営側に回るってというのは、一つ責任が重くなる部分もあるかもしれないですね。

鄭さんは、応募してくれたのは一昨年だったんですよね。

鄭 はい、そうですね。2020年です。

矢野 ただ、応募のタイミングがちょっと遅かったので、じっさいに関わってもらったのは2021年度からだった。そして鄭さんは最初から事務局メンバーという関わり方で参加してもらったんですけど、じっさい入ってみてどんな感じだったか。何かギャップとかありました？

鄭 最初、TARL (Tokyo Art Research Lab の略称/アーツカウンシル東京の別事業)と東京アートポイント計画の違いが、実はわからなくて。過去に参加した TARL のスタディと同じ形式で進めるのかなと思っていたところがあったんだけど、それが違って、いきなり事務局に入ってしまった、自分は何者なんだろう？ というか運営という立場に立って、私で大丈夫かな？ というのはありました。でもじっさい入ってみたら、事務局の一員だということはあまり意識しなくて、参加者のみなさんと一緒に模索したり、話し合ったりしていました。もちろん事務局メンバーとしてみなさんをサポートする、という部分はあります。例えば記録を書いたり、やさしい日本語の広報活動を考えたり。でもそれはこの活動のことをもっと私みたいな海外ルーツの人に知らせたいからです。

矢野 僕らのやっている東京アートポイント計画

は、というかアートプロジェクトというものは一般的にそういうものなのかもしれないけど、参加者に何か教えるとか、何かサービスを提供するっていうことではなくて、一緒に何かを作る一緒になって手を動かすというのが、多分、活動の要の部分だと思うんです。

「東京で(国)境をこえる」とは

矢野 優子さんは、一般社団法人 shelf のメンバーで、企画の立案というか、そもそも公募の段階から3年以上関わってきたことになるんだけど、大変だったなあ、って印象に残ってることとか、これは失敗でしょう。ってということとかいっぱいあるんじゃないかと思うのですが、どうでしょう？

もしくは、これをやりたかったけど、やれなかったなっていう課題でもいいんだけど。

川淵 「(国)境をこえる」って言ったときに、イメージする物事が、すごく人によって違って、いいとか悪いとかではなく、あ、こんなに違うんだな、と。

「(国)境をこえる」ってこうすることだよ？とか、あれやるべきだよ？とか、……驚くほどみんな違って。いや、こういうことを考えるんだよ、っていうことを共有することが、ものすごく大変なんだなっていうのがあって、それが一番大きいかな。

矢野 確かに「東京で(国)境をこえる」って、タイトルもテーマも強いメッセージ性を持ってるの

参加者：
阿部七海 (「東京で(国)境をこえる」事務局)、
川淵優子 (「東京で(国)境をこえる」事務局)、
鄭再晨 (「東京で(国)境をこえる」事務局)、
矢野靖人 (「東京で(国)境をこえる」ディレクター)

で、というのは、現在の日本の社会問題としても、移民とか難民の問題とか、民族やマイノリティ差別って問題があって。そのこと自体については、もちろん勉強した方がいい。それはそう思うんだけど、勉強がしくてこのプロジェクトをやってるわけじゃなくて。僕は演劇人なんだけど、ひとりのアーティストとして、どういう問いを立てていくかっていうことがやりたい。

しかも共同制作を通じて、っていうことを言ってただけど、やっぱり、何だろう？ 問題を解決しなきゃいけない、っていう考え方が強い人と、こういう問題がここにある、と発見してこうって人との違いっていうか。いろんな人がいたので、それこそ、違いをお互い認め合って、一緒に作業ができれば良かったんだけど、結果的に離れてしまったメンバーもいたので、そこは今後の課題として考え続けていきたいと思っています。

阿部 東京アートポイント計画として最初に計画されていた3年間でイメージしていた「東京で(国)境をこえる」の目標は、どんなものだったんですか？ コミュニティを作るところまでなのか、それとも東京で(国)境をこえるということを成し遂げることだったのか。

矢野 企画の発案者として答えると、僕自身は、そもそも3年でここまでって、とか、計画的なことはあんまり考えてなくて。むしろ10年ぐらいいやってようやく何かかたちになるというか、10年経って初めて、10年やってきたことの意味とか価値がわかるんじゃないか。10年続けたときに振り返って初めて、あ！ってわかることがあ

お互いの違いを知って、それを尊重しあう方法を学んで、その上でこれからの共生社会のあり方について考えてみよう。という目的がありました。

るんじゃないかなと考えていました。

阿部 なるほど。

矢野 本当はもっともっと長くプロジェクトを続けて、場所も、オンラインで、とかじゃなくて……でもこれはね、難しいのは、僕らの企画は始まった瞬間に新型コロナウイルス感染症のパンデミックに見舞われて、頻繁に人と人が会うとか、密な状態でずっと一緒にいるってことがなかなか難しい時代になってしまったんだよね。だからそこは悔しい限りなんだけど、みんなで集まる、ただただ集まるってということがもっと気軽にできるような、そんな場所があったら面白いかなとか。そういうことを考えています。

阿部 なるほど。とにかく長くってというか、「東京で(国)境をこえる」っていう看板を掲げながら活動を続けていくことで見えてくるものがあればいい。ってということですね。

共生社会とは？

矢野 「東京で(国)境をこえる」には、国籍とか、文化的、宗教的な背景とかが違う人と一緒に共同制作をして、お互いの違いを知って、それを尊重しあう方法を学んで、その上でこれからの共生社会のあり方について考えてみよう。という目的がありました。そのことについては、まだこういう課題があるぞとか、ありますか。もっとざっくり聞くと、例えば「共生社会」って、どんなものだと思う？ 未来に向けて、自分はどんな社会に

なってるっていいなって思うかっていうことと、今、自分たちがやってる活動がそれにつながっているか？ っていうことを最後に聞けるといいな。

阿部 そうですね……。早理さんチームの活動(P.41)の中で、日本語教師をしてる先生に伺ったんですが、学生たちの中には外国人だからという理由で意地悪をされる経験をする方がいると。その経験から、もしくは他の学生から聞いた話から、日本人のコミュニティにわざわざ行く、ということはないようになっている。でも、だからこそ一度、日本人もいるコミュニティに入って良い経験ができれば、もっと他の場所にも生徒さんたちは行けるかもしれないとお話されていて。そうだとしたら、外国人だから、日本人だからって理由で嫌な気持ちになることがなく、お互いにとって良い経験になれば、それは「共生社会」というものにつながるんじゃないかと思います。

矢野 鄭さんは、今の話とか聞いて、どうだろう？ じっさい外国人として日本に住んでいるわけじゃない。日本人からの差別的な、ちょっと嫌がらせとか。されたことってありますか？

鄭 ちょうど今の話でいうと、先週うちのマンションのエレベーターに、中国語で「ちゃんとゴミを分別しなさい」って書いてあったんです。その紙を読んで、何で中国語で？ という疑問があって、しかも明らかに自動翻訳で書いてあって。それを見たら、ゴミ分別をしてないのは絶対中国語がわかる人でしょう。それを読んだらちょっとイラッと来た。恥ずかしくなりましたね。

川淵 それは日本語では書いていないの？

鄭 ないです。中国語だけです。

矢野 それは……どうなんだろう？ 本当に中国の人がゴミの分別をちゃんとしてないってわかってた日本人が書いたのか。いや、ゴミの分別をちゃんとしていないのはきっと中国人だろうって思い込みからなのか。

鄭 ちゃんとゴミを分類している私が見たらちょっと……どうするべき？ 私は、どう考えたらいいでしょうか。自分はちゃんと分類しているから、私は関係ない？ それとも何か変えられるでしょうか。もっと良い対応をしていくには、どうしたらいいですか？ って、考えたいです。

阿部 確かに、どうしたらいいんでしょうね。一方的な張り紙っていうものに対して、鄭さんは何ができるんでしょう？

矢野 うーん。や、これはちょっと面倒くさいことなんだけど、張り紙を書いたのが管理人さんだとしたら管理人さんに、この中国語だと意味がよく伝わらないので、どういうふうに伝えたいか？ 良かったら私が書きましょか？ っていってみるとか。

鄭 それも考えました！（笑）

矢野 そうやって管理人さんと仲良くなって、そして決して中国人だけが、そのゴミの分別をちゃんとしてないわけじゃなくて、私（鄭さん）は

できるだけ、「自分はこういう者である」っていうのを
言わなくても生活できるようにならないかなと思う

ちゃんとしてるってことを伝えるとか、そういう、顔の見える関係になっていくしかないんじゃないかなって。そういうことが僕が「東京で(国)境をこえる」でやりたかったことでもありますね。

配慮とは？ 察し合うこと？
過干渉にならないこと？
みんなの負担を軽くするためには……

矢野 優子さんは、どうですか。

川淵 そうですね……例えば、この人はこういう人だから、こういう気遣いや配慮をしてあげなきゃいけないっていう、そういうことをわざわざしないでいいようになればいいなって思う。逆に、配慮してくれていうのも言わなくていいようになってたらいいかな。

矢野 それは察し合う、ってことでもない？

川淵 察し合う、ということではないです。難しいのだけど、そういうふうになるとみんなが楽だなって思う。

矢野 「kyodo 20_30」のゲストとして来てもらった陳さんのパートナーの真理子さんがマレーシアに住んで、陳さんの家族と暮らしてみても発見したって話で、多文化・多民族が共生していくために大事なことは、適度に無関心になることだと言っていた。日本人は過干渉なところがある。立ち入らないこともすごく大事で、適度に距離を

とるっていうことが、いろんな人が一緒にやっていけるための秘訣だという。

川淵 できるだけ、「自分はこういう者である」っていうのを言わなくても生活できるようにならないかなと思うんだけど、そうするためには、仕組みを作るか、変えるかしないといけないと思うんです。それを自分ができるとは思ってないんだけど、せめて自分の周りにいる人ぐらいは、って思う。

矢野 多分、今言った、配慮をされなくても済むっていうのは、例えばLGBTQの話で、カミングアウトって言葉があるんだけど、カミングアウトをしたことが素晴らしい、とか、しないといけないじゃなくて、別にしなくてもいいし、してもいいし。

川淵 はい。どっちかが素晴らしいとか正しいとかではなくて、別に知ってても知らなくても普通に会話できて、はあそうなんだって思える。そうなるためには、自分の考え方を変えなきゃいけないし、自分が持っている偏見を自覚しなきゃいけない。

矢野 配慮が要らない、っていうのもまたちょっと違うな、と僕が思ったのは、例えば鄭さんと話したり、ウェンさんと話をするとき、別に僕は相手が外国人だってことをどうこう思わないんだけど、でもやっぱりちょっとやさしい日本語を使おうとか、あるいはウェンさんが書いた文章に、ウェンさんが書きたかったことはこういうことじゃないかな？ ってちょっと日本語を直してあげたりとかっていうのは、これは配慮とは言わな

いのじゃないかな？

川淵 そういうことなんだけど、例えば矢野さんはうつ病だから、ときどき全く動けなくなります。じゃあ、できるだけ矢野さんに負担がかからないようにしようって思うんだけど、でも、そんなこと言ったらみんなの負担が軽くなる方がいい。

矢野 そうね。

川淵 だからうつ病だから特別に、っていうんじゃないくて、もっと別の、みんなが楽になれる方法を探せないかな、ていう。

矢野 なるほどね。ちょっとわかる。

阿部 負担を減らすやり方を探す、というのは、私もこの1年間で身につけて他のプロジェクトでもやるようになりました。忙しいときとか、疲れてるときとか、余裕がないときは、とりあえずそう言ってほしい。それがわかれば進め方を変えられます。あとは、自分のことも許すようにしています。できないときはできません、しょうがないです。って思うようになりました。

(2022年2月8日に対談した内容を再構成しています)

「経堂」で様々な国籍や言語、宗教的、文化的な背景を異にする人々が日常的に集まって、ただただ話をして過ごしたり、ときには「協働」して、作品を共同制作することができるような、そんな「共同体」を作りたい。それが「東京で(国)境をこえる」という名称に込められた意味でした。そのビジョンは3年間の区切りを迎えて、少し輪郭がクリアに、シャープになった気がしています。

メインプログラム「kyodo 20_30」を立ち上げるときに、人の集め方についてとても悩んだ時期がありました。そもそも日本の、東京で、「多文化共生」プロジェクトを日本人発信でやろうとしたとき、そのことにどうしても違和感を覚えたのですが、東京に住んでいる「外国人」を募集するっていうのは、何かオカシイんじゃないだろうか。ということです。社会問題を云々する以前に、その時点で、区別というか差別というか、とにかく分けてしまっている。僕は、ただただ、顔の見える個人に出会いたいだけなのに、それが、いろいろな文脈を背負った、自分と異なる人々だったら、そんな刺激的なことはないだろう、と。なので、募集の対象を示すなら、と、僕は募集の最初からちょっと切り口を変えて、様々なアート活動に興味がある人や、人と一緒にものを作ったり、対話をしたりしたい人、と言って募集することを提案しました。じっさい、初年度は、ここに来るとこういうアーティストやクリエイターのコミュニティと関係することができるよ！ということを示したくて、コラボレーターというかたちでいろいろな人にプロボノとして事業に参加してもらいました。

さらには、大々的に100人、200人と募集をして、集まってくれた人とそれで、何かをできるほど、自分たちにはキャパシティがない。とも思っ

ていたので、せいぜい毎年、新しい人が現れても10名程度で、それも例えば、もともと参加してくれている人とか、既に知り合いの人が、その知り合いの人を連れて来てくれる。

そういうふうに参加者がその知り合いを連れてきてくれて、ちょっとずつちょっとずつ増えていくのが良いなと。逆に言えば、そういう感じでは顔の見える関係は広がっていかないんじゃないかって思っているんです。ちょっとずつ。一人、二人とかで、来てくれた人たちと一緒に作業したり話をしたりして、関係を作っていくうちにまたそこから新たな関係が広がって、という。それはとても地道な作業なのだけれども。

そもそも僕がやりたかったのは、日本人と仲良くなりたいたい外国人を集めるというよりも、今、日本にいて、例えばそれが写真とか、映像とかって、アートに関わる活動がやりたくて、でもまだ日本に来て、1年目とか2年目だったりして、そういうネットワークとか、アートに関わるコミュニティにアクセスすることができないっていう、そういう人たちがいるのは、とてももったいないなと。

しかもそういうサークルとか、ネットワークで重要なのは、自分は何をやりたいのか？ というところで、そのことに国籍とかは関係ない。そういうふうに、国籍や、宗教、言語もこえて、集える場所を作りたい。そういう人たちがアクセスできる場所として、ここに旗を立てておきたい。「東京で(国)境をこえる」というアートプロジェクトは、そういう場所だよ。っていうのをもう、10年ぐらい続けて、ずっと旗を立てておけば、少なくとも東京にいる人には、何となく、ああ、それなら、あそこに行くといいんじゃないかな？ と

やの やすひと

Theatre Company shelf（一般社団法人 shelf）演出家、代表理事。shelf では洋の東西を問わず、毎公演、古典的テキストを中心に大胆に再構成。空間・時間に対する美的感覚と、俳優の静かな佇まいからエネルギーを発散させる演技方法とを結合させ、舞台上に鮮やかなビジョンを造形し、見応えのあるドラマを創造する手腕には定評がある。2014年9月、代表作の『GHOSTS-COMPOSITION/IBSEN』が国際イブセンフェスティバル招聘。2015年にはタイ・バンコクで初めての海外滞在制作、現地アーティストとの共同制作を実施。その後2016年にも同都市で滞在制作実施。2018年には『Hedda Gabler』にて中国初ツアー実施以降、中国では2019年にも5都市ツアーを実施している。東京アートポイント計画「東京で(国)境をこえる」ディレクター。



か、あそこに行けば、誰か人を紹介してもらえるかもよ。あなたの仲間がいるかもっていう。そういう場所になるといいなと思っていたんです。僕らがやりたいな、やれるんじゃないかな、と思ったのは多分そういう活動で、そういう活動だったら続けられるんじゃないかなと思う。少しずつ少しずつ、ゆっくりって思ってるので。

と考えると、この3年間で、何となくゆるやかなコミュニティ（共同体）が出来ている。長谷川君が寄稿文としてコメントを寄せてくれている、ショットムービーというプロジェクトに、長谷川君が、自分が関わった、関わろうとした意味とか、ウェンさんがショットムービーを続けたっていうその本質的な部分にあるのは、例えそこから人が出入りしてもずっとそこに継続している場所があれば、また戻りたいと思ったときに戻ってくるとか、何となく顔が見たいときに遊びに来ることができる。そういう場所って大事だになって。

その意味で、経堂という街は本当に懐の深い街で、特徴的なのは個人経営のお店、それはダイニングバーだったり雑貨屋だったり、カフェや文房具店だったりする。そこが、街の中で、ゆるやかなコミュニティ、つながりを形成していて、というのも街の人とどこかかしかで、僕なんかは飲み友達になっていたりする（笑）

そう。「東京で(国)境をこえる」及び、「kyodo 20_30」でやりたかったことのもう一つに、経堂というローカルな地盤を大切に、この街で小さな芸術祭を展開したい、ということがあったんです。近年、僕は演劇でノルウェーや中国、タイなどに公演に行ったり、ロシアやインドネシア、シンガポールなど海外のアーティストと現地で滞在制作

をしたり共同制作をすることが多くなってきたんだけど、活動がそのようにグローバル化する一方で、そもそも演劇というのは、とても小さな、個人はもちろん家族とか都市とか、国家とか、あくまでも地に足のついた関係、集団を描いてきたものなんです。そのことを考えると、海外での活動に比べて、自分の住んでいる、顔の見える住人のいる地域を舞台にした活動もできていないと、精神のバランスが悪いな、と。そういう野望もあっただけです。個人的に。

それより何より僕はこの経堂という街が大好きで、今回、kyodo 20_30 成果発表会「ここから展」でお世話になったマホラ食堂さん、くろねドーナツさん、僕らの活動の拠点である経堂アトリエさん、ほかにも陰に日向に様々な、多大なご協力を惜しみなくしてくださったさばのゆの須田泰成さんや、街歩きでお世話になったハルカゼ舎さん、stockさん、僕らの活動の背中を押してくれたダイニングバー太田尻家さん（太田尻家さんは僕にとって、ザ・東京アートポイントです）ほか、経堂の街のみなさんには、感謝の気持ちでいっぱいです。

最初は本当に、10年続けようっていう志があったんです。だから今も、続けることができるのであれば、何とかかたちを変えて続けていこうと思っています。応援してください。

「東京で(国)境をこえる」ディレクター

矢野靖人

旗を立てる ——「東京で(国)境をこえる」3年間の記録

編集

阿部七海（「東京で(国)境をこえる」事務局）、
川淵優子（「東京で(国)境をこえる」事務局）、
鄭禹晨（「東京で(国)境をこえる」事務局）、
矢野靖人（「東京で(国)境をこえる」ディレクター）

制作進行

須田泰成

執筆

矢野靖人、井上明日香、寺門信、長谷川祐輔、綾田將一、南田明美、aqiLa、
ゆう、オガワジョージ、胡雪寧、蔣雯、室橋裕和、小林真行、柏原瑚子

デザイン

三浦樹人

制作物撮影

岡本太玖斗（シングス）

制作協力

大内伸輔（アーツカウンシル東京）、
村上愛佳（アーツカウンシル東京）

発行日

令和4年3月22日

主催

東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人 shelf

発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8階
Tel. 03-6256-8430 Fax. 03-6256-8827

ISBN 978-4-909894-34-2 C0070

本事業は「東京アートポイント計画」として実施しています。東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。

